



2019. May.
第22号

一般社団法人日本演出者協会
協会誌「ディー」



特別インタビュー『間違いを恐れず努力し続ける!』
瓜生正美 聞き手 瀬戸山美咲

Contents ■■

- 若手演出家コンクール2018 …… 2
- 若手演出家コンクール2017
最優秀賞受賞記念公演 …… 5
- 韓国現代戯曲リーディング Vol.9 …… 5
- 特別インタビュー 瓜生正美『間違いを恐れず努力し続ける!』
聞き手: 瀬戸山美咲 …… 6
- 演出家・俳優養成セミナー 演劇大学2018 …… 10
- 国際演劇交流セミナー2018 …… 11
- 日本の戯曲研修セミナー2018 …… 12
- 理事会報告 …… 13
- 部会だより …… 13
- アンケート「演出者の仕事」 …… 14
- フェニックスプロジェクト Vol.9 …… 16
- 演出者と法律 …… 17
- ブロック紹介 …… 18
- 事業担当者名簿 …… 18
- 新入会員紹介 …… 19
- 退会・訃報 …… 19
- 続・台湾通信 …… 20
- 編集後記 …… 20

一般社団法人日本演出者協会 協会誌『D』(ディー) 第22号 定価=無料 2019年5月1日発行 2008年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】流山児祥(理事長)【編集人】秋葉由美子(広報部長)／栗原秀一(副部長)／大西一郎(担当理事)【編集委員】篠崎光正／緑川憲仁／藤間健／中村ノブアキ／五戸真理枝／富士川正美／篠本賢一／野月敦／廣岡悠那【発行所】一般社団法人日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F(〒160-0023)電話03-5909-3074
【編集・制作】一般社団法人日本演出者協会広報部 協会誌『D』編集委員会【題字】千田是也『Marionetto』より【印刷所】有限会社一光堂印刷
【表紙デザイン】前嶋のの【表紙・インタビュー写真】ボクダ茂【インタビュー編集・本文デザイン】吉田奈穂

若手演出家コンクール2018

最優秀賞 ・ 観客賞



一宮周平 (東京都/パンチエッタ)

『Tee』

作・演出：一宮周平
出演：佐藤竜、瞳、一宮周平

◇最優秀賞と観客賞をW受賞されたお気持ちを聞かせてください。
◆喜劇的な作品を作り続けているのですが、世の中では喜劇の地位ってあまり高くないような気がしていて、コントっぽい作品よりも、ズシッと心に深く刺さるような作品の方が評価されるんじゃないかと思っていました。ですが想像以上に、観た方にいろんなことを感じ取ったり、想像していただけたようで、とても嬉しかったです。

◇応募の動機を教えてください。

◆若手演出家コンクール2013で、スズキ拓朗さんが最優秀賞をとった作品をたまたま拝見して、すごく面白いと思い、ここに立ちたいと思いました。当時は演劇を始めて、まだ方向性を見つけていなかった時期で、一つの目標になりました。

◇今回の作品のテーマは？

◆いつも松本亮平さんという画家に絵を描いてもらい、その絵をテーマに台本を書いています。松本さんの絵が7枚あったので、すべての絵を展示した空間で上演しようと考えたのが出発点でした。展覧会の「Ten」。この言葉からいろんな要素を抜き出して作っています。作品を作るときはいつも、日常的で何気ないひとりの物事を多方面から見つめて、おかしみとか、面白みを見つけていきます。とらえ方次第でことごとく沢山あると思うので。悪人にも、その人なりの正義があるとか。

◇短編をしないで行く過程で、こだわっていることはありますか？

◆面白みを感じてもらえる要素は絶対に残そうと思っています。お腹の上で肉を焼くとか。ミュージカルの場面は10分間で4曲歌うとか、3人家族が一畳で暮らしているとか。それから演劇的空間でしか見られないものを作りたいと思っています。最終的になんの話？という感想を持たれる方もいるかもしれませんが、短編の一本一本はしっかり作りこんで、お客さんにいっぱい笑ってもらいたいと思っています。もしかしらうかかも、とつながりを想像して楽しんでもらえるお客さんがいてもいいのかなと思っています。

◇1回目と2回目の本番の間に意識的に変化させたことはありますか？

◆いただいた映像を何度も見て、テクニカル面を少し修正しました。一回目は場当たりきの時間が短く、こだわっている時間がなかったため。演技についても、映像で見えづいた部分もありました。台本には現実世界からかけ離れた設定がたくさんあるのですが、それが登場人物たちの常識だったらと考えて、ただそこで生きていくことを一番大事にして演出しています。出演の佐藤竜さんと瞳さんはお二人とも素晴らしい役者で、本当にその場で感じて動いてくれて、その役として生きてくれるんです。1回目も悪くなかったのですが、2回目は演者の二人から受け取る感情やエネルギーがとても大きく、最高の芝居ができたという実感がありました。

◇今後の抱負を教えてください。

◆仕事の幅を広げて、演劇で生活できるようになりたいです。いつか古典戯曲の演出にも挑戦してみたいと思っています。ですが、パンチエッタは経済的な成功を目指すよりも、自分が面白いと思っていることをやる場として続けていきたいです。最近、レストランで上演するお芝居の演出をさせていただいたりして、自分のスタイルは劇場じゃない場所での上演のほうがマッチしているのかもしれないと思うこともあります。ですがこだわるところはなく、どこでも上演できる場所があればやってみたいです。



パンチエッタ主宰。
人間の身体を駆使し、表現の可能性を示唆する。装置のない空間に存在する音・光・身体が作り出す時間は、観る者の想像を喚起し独特の世界へと導く。第9回せんがわ演劇コンクールにて、グランプリ・オーディエンス賞・俳優賞を受賞。

優秀賞

うえもとしほ (東京都/すこやかクラブ)
『ささやきの海』 作・演出・振付:うえもとしほ
出演:二石原夏実、日下麻彩、甲斐美奈希、佐久間文恵



◇応募の動機を教えてください。
◆なんだろう? 「コンクールがあったから」みたいな(笑)。でもいろんな人にも観てもらいたいとか、賞をいただけるって皆さんに知っていただけたらいいかなって、いろんな動機がありましたね。

◇実際に応募してみたい感想は?
◆思った以上に大変だった、みたいなことは特になくて。でも奥行きがあまりない劇場だったので、そこは気を付けながら作品を作りました。今までも二次審査まで残ったことは何回もあったんですけど、今回最終審査まで残って優秀賞をいただくことで、周りの皆からの「おめでとう」っていう反応が嬉しかったですし、チラシに載せていただいたことで広く知っていただけた良かったなと思います。

◇アフタートークでは男性の審査員と女性の審査員とで全く感想が違い、男性からは「身体表現と言葉を使った表現、どっちが好きなの?」という話も出ました。
◆(男性と女性で) あんなに反応が違うと思わなかったのでびっくりしました(笑)。普段は言葉が先か、身体が先かはあまり考えていませんけど。表現したいことと、どんな人にそれ(表現)が合うかっていうことを考えていくと、自然と「言葉かな?身体かな?」こういうこと表現したいな...あ、身体だ!みたいに感覚的に選んでいる気がします。でも言葉にできないものに自然と目がいきがちなのところはありますね。特に今回は、身体だけで表せるところはなるべく身体だけでとか、必要ない言葉は極力削ってこういう意識で作っていたと思います。

◇今後の抱負を教えてください。
◆言葉とか身体とか、色々な要素を自分なりにもって極めて、作品の中に取り入れていけたらと思います。



すこやかクラブ主宰。2010年/パタラマラ舞台芸術研究所卒業。2016年にすこやかクラブをカンパニー化させ、同年たちかわ創造舎のシェアオフィスメンバーになる。2018年第9回せんがわ劇場演劇コンクール 演出家賞、佐藤佐吉賞 2018 最優秀演出家賞を受賞。

優秀賞

國吉咲貴 (埼玉県/くによし組)
『毒王』 作・演出:國吉咲貴
出演:首多衣子、永井一信、小林義典、渋谷裕輝、中野智恵梨、三澤さき

◇応募の動機を教えてください。
◆戯曲の賞は応募して賞を頂いたりもしていましたが、演出家の賞っていうのはなくて、主宰として自信を持ちたいというか、ちゃんと脚本も演出もしたいんだぞって思えるように賞が欲しいなと思って。そんな時に知り合いの俳優に教えてもらい、応募しました。
◇演出をするにあたって意識した点は?
◆私が作っているものは「異常で日常でシユール」というのがコンセプトなので、なるべくそれが舞台上でしっかりと形になるようにっていうのを目指そうと思いました。変な事をするっていうよりは、日常と非常が一つになっていくような空間になるように意識をしていました。



◇最終候補者の中で、気にしていた方はいますか?
◆勝手になんですけど、うえもとさんが王子小劇場「佐藤佐吉賞・最優秀演出家賞」を受賞されていて、それを見てという事と、同じ女性という事もあって...うえもとさんのライバルになりたいって勝手に思っていました。

◇最後に、國吉さんにとつての「毒」って何ですか?
◆良くも悪くも他人の意見です。他人が持っている意見っていうのを、自分に落とし込もうとしたときに、私は...化学反応じゃないけど...「ダメだよ」っていうのが起こる感じがして、思ってもいない事を植え付けられたりとか、そういう他人が他人に何か物事を植え付けていく時に、凄く毒が入っているような気がしています。



埼玉県出身。2015年にくによし組を立ち上げ、以降全作品の脚本、演出。佐藤佐吉賞2017優秀脚本賞受賞。他に、せんだい短編戯曲賞、劇作家協会新人戯曲賞、伊参スタジオ映画祭シナリオ大賞短編部門などの最終候補。

優秀賞

八代将弥 a.k.a. SABO (愛知県/room16/16号室)
『時計仕掛けの始まりと80グラムシテイ』 作・演出:八代将弥 a.k.a. SABO
出演:八代将弥、杉浦哲平、永田祐己、永田貴椰、加藤鈴那



◇応募の動機を教えてください。
◆去年の若手演出家コンクール最終審査に神谷尚吾さんの作品に俳優として出演して、その時に最終審査の雰囲気を感じて、自分も一度、試してみたいと思いました。そして何より審査員に評価されることって名古屋ではそんなになくて、そういう場で審査員からジャッジされたらどうなんだろうなって思ったことが応募の動機です。

◇実際にアフタートークで審査員の方と話してどうでした?
◆正直、僕もちょっと舞い上がっていたんで、その辺は読めないというが審査員の方々は楽しくしゃべったな、という感じでした。

◇今回の作品で伝えたかったことを教えてください。
◆お客さんに伝えたいことはないかもしれないです。それよりも自分と向き合った結果の方が大きいというか。この作品は若いころに一度上演したんですけど、その当時の表現初期衝動で仲間と一緒にやりたいようにやった結果、名古屋のあるコンクールで賞をもらった、という思い入れのある作品なんです。僕も歳を重ねて良くも悪くも大人になったんで、今の自分が若いころの作品と向き合ったらどう立ち上がるかに興味があったわけなんです。歳を重ねて保守的になっちゃって感じるんですけど、でも別にそういう自分が嫌いなわけじゃなくて。若手演出家コンクールは「若手」って思っているから、若いころに書いた台本で挑んでみたらどうなるんだって思ったことが大きいんです。

◇演出だけじゃなく出演もされましたが、出演者としてはどんな感想を持ちましたか?
◆お客さんですよね? 杞憂であればいいんですけど、ちょっと渋いかなって感じ(笑)。

◇演出家としての今後の抱負を教えてください。
◆信頼を得たいですね。お客さんというより、一緒に物を作る仲間たちからの信頼です。今はまだ道半ばだと思っています。



room16/16号室主宰。静岡生まれ名古屋在住しベゼン黒川の作家、演出家、俳優。「狂わせたい。狂いたい」そんなことを最近考えてやっている。令和元年、自身初となる、関東圏のキャスト陣と東京で作、演出、作品(沈黙タイ)を上演する。

若手演出家コンクール2018 公開審査

若手演出家コンクール2018の最優秀賞を決める為の公開審査が、2019年3月3日17時より、下北沢「劇」小劇場にて行われた。

今回のコンクールは72名の応募者の中から第1次審査、第2次審査を経て、4名が優秀賞に選出された。この4名の中から最優秀賞を選出する為の最終審査公演が2019年2月26日(火)〜3月3日(日)まで下北沢「劇」小劇場にて行われ、その全ての上演後の公開審査での投票にて、各賞が決定するという流れである。

公開審査会を担当した審査員は下記9名である。(あいうえお順、敬称略)
 鵜山仁、加藤ちか(舞台美術家)、鐘下辰男、篠崎光正、日澤雄介、平塚直隆、松本祐子、山口宏子(朝日新聞記者)、流山児祥
 各審査員が全候補者の順位に従って4点、3点、2点、1点という4段階評価での採点を行った。

【講評】(全審査員の発言より抜粋)

■一宮周平(東京都/パンチエッタ)

鐘下▼ 演出家として、現代という社会と世界を感じどのように作品化していきたいのか。また、演劇でしか語れない事の何かに注目して見た時に、一宮さんに関しては、演出家を持っているある種の方法論とある種の成功を見せていたのではないかと思います。

松本▼ 演出家の仕事は何だろうかという



視点の評価基準にしました。一宮さんが如何にして時間と空間を演出し、観客に語りかけたか、一見するとコントのような短いやり取りが徐々に繋がっていく、その繋げていくための馬力がある方だなという印象です。小道具、美術、音楽、それぞれにおいて細かいところまで目が行き届いた演出でした。

流山児▼ 凄く面白かった。世知辛いたった一畳の世界で描かれている事に唐十郎を思い出した。人間の底辺に生きているニゲンをきちんと描いていた。ヒトは何によって規制されているのか？、一つにつきながら凄く分かりやすかった。折り重なる親子の皮膚感覚なども一畳で描かれる事が素晴らしい。初演も観たが、今回圧倒的に進化していた。

■うえもとしほ(東京都/すこやかクラブ)

日澤▼ 動きに関しても言葉に関しても、女性的で繊細で。男だったらそういう感覚は無いなというのが、瞬間瞬間にふんだんに散りばめられていたので、そういう所は非常に面白く見る事が出来た。糸電話の発想も面白かったからこそ、自分の等身大の感覚、手の届く感覚のもう一歩先を次は見てみたい。

山口▼ とても美しい端正な作品で、楽しむことが出来ました。繊細な表現の中に、時々ハツとする瞬間がある。ごくたまに訪れる、ささやかな、でも特別な瞬間。その輝きを見落とさず表現したのが、作り手の優れたところだと思います。こうした瞬間を感じる事で人は生きていけるんだなあと、いうことを改めて感じさせてくれました。

■國吉咲貴(埼玉県/くによし組)

平塚▼ 編集力と言いますが、役と役が会話をしてる所に説明も同時進行で来るというのは面白い。独特の演出だと思っで見えてきました。國吉さんの作品は何かを纏まとっているのが上手いと言うか、例えば笑いを纏まとってくるのか「これは面白い何かだ」と思わせるものがあるという事は強い。しかし、発想自体は非常に面白いのだけど、もっとその先が見たい。面白いと思った種が花を開いて欲しいと感じていた。

篠崎▼ 見た目の部分での演出力では、欠落している部分があるかもしれませんが、作風と言いますか、書き方に既に演出要素が組み込まれている気がします。常に劇的な要素を入れようとしている演出家的な発想があります。もっと今の自分が持っているものを信じた方が良い気がします。演出とはこういうものだとか考え過ぎてありきたりのものにする必要はない。稽古場を工夫してそこで生まれるもの、自分が想像していなかったものを大切にすれば、より奥行きのある演出ができると思います。

■八代将弥 a.k.a. SABO

(愛知県/room16/16号室)

加藤▼ まず、そこに演出の追及があった

結果として、肉薄している演技を、観客の私達は、生々しく感じる。生々しくリアリティのある演技に対して、観客は自分の観て感じている現実と、そうでない作られた現実を同時進行で感じている。例えば、肉薄する良い演技をすればするほど、芝居で作られた現実、例えば体を吊す為のハーネスの金具音などが、どうしても出てしまった時に、観客は作られた現実を打ち消す大きな演出力を感じて納得した。演技の肉薄につりあうまでの、演出力の到達点を観る側は求めたくなるのである。

鵜山▼ 死を舞台でどう表現するか？というの、勿論出来ない事が沢山あったり、一方でカウントダウンするだけで怖いという臨場感もあるから、死の具体性について、表現のバラエティを見せてもらえればと思ったわけです。でも、何を見るのか？というのが絞り切れなかった。舞台装置にしても、全体が積み木細工で出来た基盤が最後に裏切ると言うか、死を補助するとか、実際はそこまで見えてこなかったのだけど、例えばそういう理論武装というか構造化が出来たら面白いんじゃないかな？と思ったりしました。

投票結果	一宮周平	うえもとしほ	國吉咲貴	八代将弥 a.k.a. SABO
鵜山仁	4	1	3	2
加藤ちか	4	3	1	2
鐘下辰男	4	3	2	1
篠崎光正	2	1	4	3
日澤雄介	4	2	1	3
平塚直隆	2	1	4	3
松本祐子	4	1	3	2
山口宏子	4	2	3	1
流山児祥	4	1	3	2
結果	32	15	24	19

若手演出家コンクール2017

最優秀賞受賞記念公演

受賞者 澤野正樹さん

インタビュー

劇団 短距離男道ミサイル

「父さん、晩年ってどういうのかい、これは。」

「涙なみだの最終ツアー」これで見納め太宰三部作完結編」

原作：太宰治「晩年」

作・演出：澤野正樹

日程：2019年3月6日～10日

会場：劇小劇場（下北沢）

「衝撃的な告白が上演中に吐露された。受賞者澤野正樹さんの演劇活動休止宣言である。」

◇最優秀賞受賞の前と後での変化について

◇賞を頂いて流れが来たなっていう感覚はあったんですけど、視野が広がった反面現実の生活と関わる部分で悩むことも多くなりました。3月、4月、5月、10月に公演し、9月ごろには東京でトップレベルの現場にも関わらせて頂きました。そんな日々のめまぐるしい活動の中で、主演俳優が劇団を抜けたり、家族ができて自身の活動もなかなか自由がきかなくなってきたり、なんとなく先が見えてしまって、この先自分がこれからどうしていきたいかということが分からなくなっちゃったという感じの1年でした。

◇受賞公演の作品について

◇僕がお芝居を続けることが難しいぞとなつたときに、自分自身をさらけ出してみようかと思いました。久しぶりに役者をやったので演出の視点が欠けてるなと思うところもあり、若手演出家コンクールの記念公演としてはちょっとどうかないとも思いつつも現状をすべて見せられるように作ったつもりです。ある種、僕も太宰に影響を受けていて、傷ついて死ななきゃならないって感覚がちょっとあって、僕の感じているごく個人的な苦しみを通じて、お客様が自分のことを見つめ直すような、そんな時間に、作品になつたら嬉しいことだなと思います。

◇今後について

◇僕が演劇と距離をおいた時に、演劇が僕にとってどんなものなのか、劇団員が僕にとってどんな存在だったのか、初めて自覚できるのかなって思います。この作品が僕という一地方演劇人がこういう状況になつたという問題提起となればいいなと思つていて、未来がすこし変わればいいと思つています。まあ一度、立て直しの時期をもって、そのときに自分がまた演劇に触れたいと思うのか、今はそれを決めないでいようと思つていますが、もし僕が戻ってきてやるのなら、この劇団でやりたいと思つています。もともと立ち上げメンバーは僕しか残ってなくて、彼らはあとから入ってきたメンバーですけど、ともに戦ってきたホントにこれ以上信頼できる奴がいるかってくらい信頼できるメンバーなので、彼らが力強く活動してくれることを願つし、期待と悔しさとをもちつつ、見守つていきたいと思つています。また一緒に皆さまの前に立つことが出来たらと思つています。



日韓演劇交流センター

韓国現代戯曲リーディングVOI9

2019年1月23日～27日
会場：座・高円寺1

『刺客列伝』 作：朴祥鉉（パク・サンヒョン）、翻訳：木村典子、演出：川口典成
『黄色い封筒』 作：李羊九（イ・ヤング）、翻訳：石川樹里、演出：中野志朗
『少年Bが住む家』
作：李ポラム（イ・ポラム）、翻訳：沈池娟（シム・チヨン）、演出：大澤遊

シンポジウム『社会的な事件と演劇』

シンポジウムパネラー：李ポラム、朴祥鉉、森正敏/シンポジウム進行：河野孝
主催：一般社団法人日韓演劇交流センター/後援：韓国文化院、杉並区
提携：NPO法人劇場創造ネットワーク、座・高円寺、Tokyo Tokyo
FESTIVAL、2019都民芸術フェスティバル

座・高円寺1にて9回目を迎える韓国現代戯曲ドラマリーディングが開催された。これまで日本の現代戯曲を韓国にて、翻訳とリーディング上演を通して紹介する企画と交互に開催されてきた。今回は『刺客列伝』（パク・サンヒョン作、木村典子訳、川口典成演出）、『黄色い封筒』（イ・ヤング作、石川樹里訳、中野志朗演出）、『少年Bが住む家』（イ・ポラム作、シム・チヨン訳、大澤遊演出）の3作品が上演された。各作品は2回ずつ上演され、1回目の上演後は批評家と演出家によるアフタートーク、2回目の上演後は来日した韓国人作家と演出家によるアフタートークが催された。

『刺客列伝』は朝鮮の武帝からの独立を扱いつつ、世界中の現代に至るまでの刺客/テロリストたちの列伝を描く作品。物語は日本の近未来にまで及ぶ。『黄色い封筒』は韓国で実際にあった自動車部品工場におけるストライキをテーマの縦軸にしつつ、セウォール号沈没事故を横軸に編み込んだ



▲『黄色い封筒』撮影：奥秋主

だ作品。韓国社会における格差と分断が浮かび上がる。『少年Bが住む家』は14歳の時に殺人を犯してしまった青年と彼を取り囲む家族、この家族の家の近所に引越してきた女をめぐる作品。加害者の過去を抱えていかに生きるかが描かれる。作風の全く異なる3作品は、それぞれが韓国現代演劇の一端を鋭く示していた。

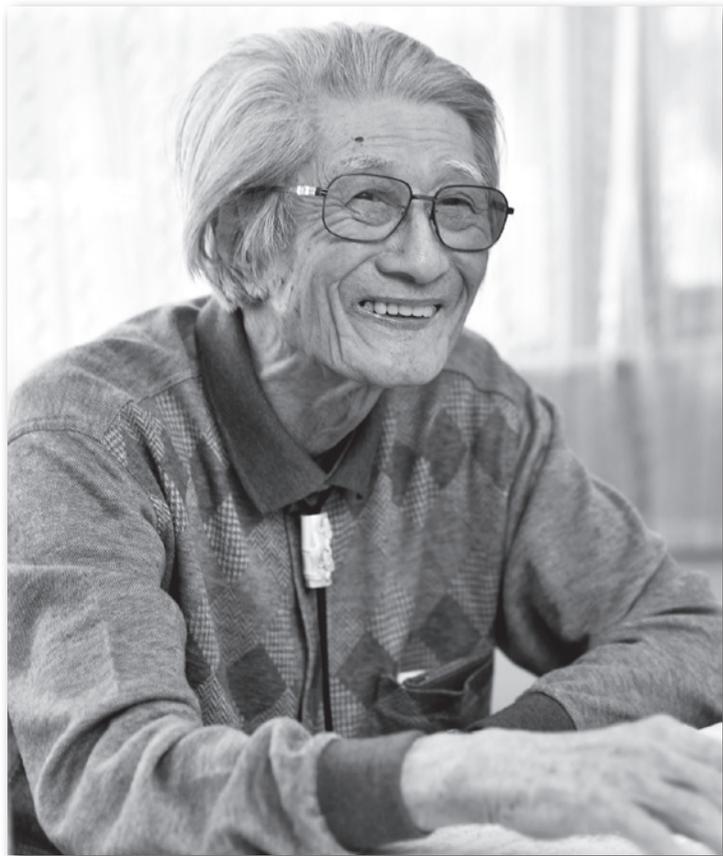
3作品のリーディング公演の後、批評家の河野孝氏の進行で、劇団制作者、作家、翻訳者によるシンポジウム『社会的な事件と演劇』が開催された。韓国演劇について議論しつつ、演劇の持つ社会への批評性と可能性についても話された。また企画を主催する日韓演劇交流センターでは、ドラマリーディングの開催の度に『韓国現代戯曲集』を出版してきた。今回9冊目の発行となる。

日本と韓国の間では現在、政治問題でさまざまな対立が起こっているが、演劇を含めた文化交流を通して、互いを理解し合い、尊重し合う姿勢が生まれるように思われる。【報告】中野志朗

間違いを恐れず努力し続ける！

令和元年を迎えた今号は、大正・昭和・平成と3つの時代を駆け抜けてきた現在94歳の瓜生正美氏に特別インタビューを敢行。大病や戦争を経て、戦後すぐに劇団を立ち上げ、以来長年にわたって演出・脚本を手がけながらいくつもの劇団を率いてきた瓜生氏。その貴重な体験をうかがいました。聞き手は、瓜生氏が33年間代表を務めた青年劇場で、2015年に『オールライト』の劇作、2017年に『梅子とよっちゃん』の演出を手がけた瀬戸山美咲さん。どんな話が飛び出したのか。ご期待ください。

聞き手：瀬戸山美咲
(取材：2019年3月27日)



瓜生正美 (うりゅう まさみ)

1924年福岡県若松市(現・北九州市若松区)に生まれる。1944年学徒出陣で兵役に就く。戦後、土方与志に師事。1964年、「秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場」創立。以来1997年まで劇団の代表を務めながら、『偽原始人(原作:井上ひさし)』『シシとササの伝説』等、青少年の問題と深く向き合った作品群を生みだしていく。代表作『青春の砦』は、青少年向け戯曲の名作として今も語り継がれる作品である。

(社)日本劇団協議会会長、日本演出者協会理事長を歴任。現、青年劇場、(公)日本劇団協議会顧問。

演劇の原点は高校時代にあった
高校から軍隊へ、そして敗戦へ

瀬戸山 瓜生さんが演劇を始めたきっかけは何ですか？

瓜生 僕は今まで兵隊に行つて帰つてきてから演劇を始めたと思つていただけで、この企画をもらつて思い出したんです。高校時代にきっかけがあったことを。僕は五高(熊本にあった旧制第五高等学校)にいた頃、5歳の頃から剣道をやってきたから剣道部と、もう一つ、中学の先輩方に誘われて学校公認ではない文芸部もどきの会にも入っていたんです。五高時代、1年のときは寮生活をしていて、2年目に寮を出て白川にかかる子飼橋(こがいばし)近くの剣道部の下宿に移つたんです。その近くに若松中学の先輩方が下宿していてそこに集まつてました。先輩方は文学青年でね。

瀬戸山 そこで芝居をやつていたんですか？

瓜生 芝居は上演しなかったけど、本の読み合わせをしたりする読書会、まあ戯曲研究会みたいなもんだね。喜んで入つたわけじゃなかったけど(笑)、それが何となく芝居に関わる始めになるのかなあ。

瀬戸山 原点は高校時代にあつたわけですね。それまでは演劇に関わる環境はなかつたんですか。

瓜生 全然！軍国少年ですから(笑)。そりゃあもう3つ4つの頃から天皇陛下の御為に喜んで死ぬことを教えられて育つたんだから。「大日本大日本、我ら国民6千万は、天皇陛下を神とも仰ぎ、親とも慕いてお慕い申す」っていうのが修身(当時の道徳教育)にあるんだよ。

瀬戸山 召集令状が来たときは二十歳ぐらいですか？

瓜生 それまではね、大学に行つていたりすると徴兵猶予があつて、満25歳までは兵隊に行かなくて済んだんです。ところが戦局が思わしくなくなつて、1943年に学徒出陣が始まり徴兵猶予が一切なくなつた。文科系の学生だけね。理系の学生は兵隊に行かなくても軍需産業などに使道があるから。僕は1941年に第五高等学校に入ったけれど、結核で休学したりなんかしたんですよ。当時は結核が流行つていた頃でね、今はいい薬があるからなんてことはないんだけど、死病の時代ですから。結核で1年間休学して英彦山にこもつて治療しました。僕は今は痩せてる

けど割とがっちりしてて治りが早くてね、お医者さんにもほぼ大丈夫と言われて英彦山にあるスキー場に行ったんです。初めてなのに直滑降して、あれよあれよという間に岩にぶつかって……。

一同 ええっ!?

瓜生 打撲性肋膜炎(胸膜炎)炎で小倉の市民病院に運ばれたの。そのときに徴兵検査の通知が来たんです。院長さんに「私が証明書を書くから延期を願いなさい。また来年、元氣になったら行けばいいんです」と忠告されたんですけど、熱は下がっていったし治つてると思うので徴兵検査を受けてきますって行つたんですよ。体格から言えば甲種合格だと思っただけで、レントゲンを撮ればバレル(笑)。普通だったら丙種で来年受け直しになるはずだけど、僕は必ず軍隊に入る第一乙種になった。召集令状が来たのは1944年の暮れです。ちょうど正月休みで若松に帰っていたときだったから非常によく覚えてます。それで1945年、敗戦の年の正月早々に入隊したんです。

瀬戸山 召集令状が来たらずに入隊なんですか？

瓜生 もう、すぐに入隊。一週間かな。正月に久留米の四十八連隊鶴丸隊に配属になりました。隊長の鶴丸さんは同郷の若松の人で、軍人ではなく鶴丸汽船という会社の専務さんだったかな。だから僕は軍隊では非常に楽をした(笑)。僕は島原半島の西側にある橘湾の警備部隊で、大本営が敵の上陸もあり得ると判定したため、それに備える部隊だった。穴掘り部隊と言われてました。湾からすぐ山があり、敵は船で来て艦砲射撃で徹底してこちらを潰し、もう抵抗力がないと見定めたら上陸してくる。こちらはそれが分かっているから、山に何本も穴を掘って貫通させ、艦砲射撃の間は山の手前に隠れていて穴を通して迎撃する作戦。そのための穴をみんな掘りに行つたの。僕は一人だけ事務所勤務だったから穴は掘りなかつたけど、兵器係、食糧係、命令受領の係など全部一人でやりました。下士官がついてるんだけど、下士官も穴掘りに行つてるから(笑)。

中学時代の親友との再会がきっかけで、

かもめ座、九州演劇連盟を次々立ち上げ、本格的な演劇人生へ。

瀬戸山 二十歳であらゆる業務を一人でやつたんですか。

瓜生 僕は指揮班っていうところから、戦争が始まると中隊長のすぐ下についていろいろな手配をする役でね。8月6日に広島に原爆が落ちて、9日に長崎に原爆が落ちて。長崎に近いから、指揮班の業務で救援隊を長崎に連れて行つたんです。僕は連れて行くだけだったんだけど、すぐ置いて帰るわけにいかないから一日だけ手伝った。放射能なんて知らないから、とにかく真新しい軍手だけ支給されて喜んで爆心地に行つて、黒焦げの死体を手で掴んでトラックに積んでたんだ。一日だけでも落ちた翌日に爆心地に入っているから、僕は第二次被爆者なんです。戦後もかかりつけのお医者さんは結核より原爆の後遺症を心配して、肉をもぎ取られて癌研に送られたの。要するに原爆の後遺症で癌になる可能性があったからね。僕は幸い結果はいつもマイナスで何ともなかつたけれど。

瀬戸山 8月15日はどういう気持ちでしたか？

瓜生 まあ泣いたりわめいたりする人もいたんですけど、僕は一区切りついたという感じだったですね、正直言つて。泣いたりわめいたりするのは全くしなかつた。どんどんどんどん負け戦が近付いて来ていたんだから。

瀬戸山 負け戦って分かつてたんですか？

瓜生 分かっている分かつてる。そりゃ口にしたら怒られるけど(笑)、相当の人は分かつてたんじゃない？東京は爆撃されるし、原爆は落とされるし。一区切りついたとは思つたけど、ただ僕は敗戦事務をやつたんですよ。みんなを無事に郷里に送り返すために。だから全部終了して若松に帰つたのは10月ぐらいでした。

瀬戸山 結構かかつたんですね。

瓜生 僕はあの戦争を、大東亜民族解放の聖なる戦いだと思つていて、天皇陛下のために喜んで死のうと思つた一青年だった。それが新聞やラジオの報道で、アジア侵略の戦争だと知つたときには本当に怒つた！騙しやがった。以後の70数年は、騙したやつへの戦いの人生ですよ。

断り切れず引き受けた通訳の仕事が軍資金に 火野葦平さんと出会い、劇団創立へ

瀬戸山 若松に帰つてすぐ学校に戻つたんですか？

瓜生 いやいや。それから幸か不幸か、僕はアメリカ兵の通訳をやることになるんです。福岡の芦屋にあった帝国陸軍航空部隊の飛行場がアメリカ軍に接収されて、アメリカの飛行隊が来たわけ。そこから一番近い女郎屋が中間町(現・中間市)にあつて、アメリカ兵が遊びに行くんだ。父方の遠縁が中間の町長をしていて、そこから頼まれたんでしょう。僕の英語は、読み書きは普通か普通以上にできただけでも会話はほとんどダメだったんじゃないかなあ。でも断り切れなくて引き受けました。

瀬戸山 女郎屋に行くアメリカ兵たちの通訳ですよ。とても気になります。

瓜生 それは相当高給でした。親父はどこかの会社の重役だったけれど、親父の何倍ももらつてました(笑)。

瀬戸山 まだ学生ですよ？

瓜生 もちろん。大いに遊びましたよ(笑)。

瀬戸山 劇団はいつ頃始めたんですか？

瓜生 10月に若松に帰つてきて、1946年の正月ぐらいに、中学時代の親友の謝敷というやつが家にたずねてきてね。そいつは東大生で、「土方与志を呼んでゴリーキーの『敵』っていうのをやつてる。おもしろいぞ！お前も演劇をやれ」と言うんですよ。

若松では昔、火野葦平さんが実行委員長で『太陽のないう街』という有名なプロレタリア演劇運動(※1)の芝居を呼んだことがある。若松は演劇の町だから僕にもやれと。その火野葦平さんや、火野さんの早稲田の同級生などと一緒に若松で「かもめ座」という劇団を立ち上げました。それが本格的な演劇生活の始まりですね。



※1 第1次大戦後に社会主義理論をその思想的裏付けとしながら、労働者、無産者階級およびそれを支持する知識人、文化人によって行われた演劇運動。



若松でかもめ座をやりましたが、僕は九州大学に入ったの。九大に演劇部を作ったのは私(笑)。それから九演連、九州演劇連盟を福岡に作って、僕の構想では福岡だけじゃなく九州全体の組織にしようと思ったけど、そうはなかなかいかなかった。

瀬戸山 始めた瞬間にもう全てやってる！すごいですね。

瓜生 結構忙しかった。若

松でかもめ座をやりに、福岡で九演連をやったね。そんなお金がなぜあつたかと言うと、通訳をやったから(笑)。

瀬戸山 なるほど！かもめ座で演劇を始めたとき、瓜生さんは俳優をやっていたんですか？

瓜生 そうだねえ、最初にかもめ座をやったとき……、一本は演出して一本は役者したなあ。

瀬戸山 最初から演出を担当されるとは、ものすごいチャレンジ精神ですね！作品は？

瓜生 有島武郎の『下モ又の死』でした。

土方与志さんに弟子入りし、大阪で初仕事

「芝居の話ばかりするな」の意味するところとは？

瀬戸山 土方与志さんにお会いしたのは1947年だそうですが、そのときはもう東京に来ていたんですか？

瓜生 いやいや、まだ九州でかもめ座や九演連をやっている頃に、土方さんが講演で九州に来たんです。確か新協劇団や文学座が九州公演に始めたのが1947年。後に東京労演を作った皆川晃さんが、炭鉱のオルグをするのに僕の家をひと月ほど泊まり込んでいて親しくなり、土方さんを紹介してくれたお陰で弟子になったんだ。僕は九州大学を中退して、1948年に土方与志が大阪で演出をした『ロミオとジュリエット』の演出助手になったの。それが最初の仕事ですね。公演期間は1ヵ月で、50から60ステージやっ

人間は間違うもの。努力するやつは間違ってもまた努力して乗り越えて進むことができる。間違ったらやり直せばいいんです。

たかな。昼は高校生に見せることが多かった。土方さんは演出が終わったらパースと帰っちゃって、でも公演はそれから1ヵ月続くわけでしょう？毎日ちゃんと芝居を観てダメ出しの仕事をしたの。

瀬戸山 いきなり大役ですね！

瓜生 このとき初めて演出助手料をもらったんです。今でも記憶にあるけど、5万円ももらったと思うんだ。当時は女房と子ども二人の家庭の平均賃金が1万3千何百円という時代だったんですよ。

瀬戸山 かなりの額ですね。芝居でそんなにもらえるなんて！その後はずっと与志さんの演出助手を？

瓜生 僕はしばしば大阪に残ったんです。大阪芸術劇場に請われて1年ぐらい仕事しました。その後、前進座の演出をしていた土方さんにそろそろ東京に出ていこうと言われて上京し、1950年会というスタニスラフスキーの研究グループに参加しました。ちょうど共産党が分裂したり、前進座さんが劇団ぐるみで共産党に入った時代ですよ。前進座の演出助手をほぼ全部やっていました。前進座でもちゃんとした演出助手料をいただいていたよ。大阪ほどではなかったですけど(笑)。その頃は、東京喜劇座という劇団もやっていて、いずみたくもいたんです。彼が役者を始めた頃、フランスの喜劇を翻案して『裸にされた所長さん』っていう作品をやりました。確かその頃忙しくて一晩で翻案したんじゃないかなあ。

瀬戸山 筆が速くてうらやましいです(笑)。

瓜生 この頃は50年問題(※2)でゴタゴタして僕もちょっと嫌気が差しましてね、結核のこともあったし一時期若松に帰ったんです。土方与志さんも50年問題の最中だったから、若松に来て2、3ヵ月僕の家に泊まってた。そのときに火野葦平さんとも仲良くなつて飲み歩いたり……：：：そう

だ！我が人生で一番たくさん飲んだのはそのときだ！

一同 (笑)！

瓜生 火野さんはビールしか飲まない人。土方さんは日本

酒しか飲まない人、僕はどっちも飲む人(笑)。土曜日に稽古が終わって夜から飲み始めて、日曜日は24時間飲んだり寝たりしながら飲んで(笑)、月曜日の朝まで飲んだ。ビールケースが3つ、日本酒の一升瓶が10本は空いたと思うなあ。眠くなったら寝て、また飲んで話して。これは土方与志の遺言の一つだけどね、「何でお前らは飲むと芝居の話しかしねえんだ。他の話はねえのか？」と。要するに、芝居だけやっていると視野が狭くなるよ。「一生懸命打ち込むのはいいけれど、輝くものにするためにはもっといろいろ知らなきゃ！人生を知らなきゃ。社会を知らなきゃ」それが僕が土方与志から教わったことです。

舞芸座分裂から青年劇場創立へ 言葉の言わんとする中身を伝えることが大切

瀬戸山 瓜生さんはその後一度演劇から離れたと耳にしたんですが、何をされていたんですか？

瓜生 五高時代の友人と貿易会社をやりました。当時は珍しい共産圏貿易をして、満州から大豆を輸入したり、中国の開港炭やベトナムのホンゲイ炭を輸入していました。

瀬戸山 その時期は全く演劇はやらなかったんですか？

瓜生 全く止めてました。4、5年やっただんじじゃないかな。

瀬戸山 演劇に戻ってくるきっかけはあったんですか？

瓜生 1959年に土方さんが亡くなって、追悼公演の演出を僕がやっただんです。舞芸座がまだあった頃で、その公演をきっかけに僕も舞芸座に入ったんだ。でも1963年には分裂してしまつた。舞芸座の一部の人が、11歳年下の弟・良介が主宰を務める「発見の会」に参加したんだ。良介と僕の間には3つ年下の秀美がいるんだ。秀美は東大の人形劇団ポポロの創立者で、後にポポロ事件(※3)という有名な事件が起きるんだ。

瀬戸山 三兄弟全員演劇をやっていて、しかも考え方が違ったんですね。青年劇場は、それまでの舞芸座の路線を

※2 コミンフォルム(共産党・労働者党情報局)が日本共産党を批判したことをきっかけに日本共産党で起きた内部分裂。

※3 東京大学の学生団体「ポポロ劇団」が校内で公演中、私服警官が潜入しているのを学生が発見し取り押さえた際に学生が暴行を加えたと起訴される。警官の行為は学問の自由・大学の自治に対する侵害であるか否か、大学の自治が争点となった代表的な事件。



守りたい人たちが集まったという感じなんですか？
瓜生 いやいや僕が舞芸座が分裂して辞めていった人を呼び集めたんだ。僕自身、舞芸座ではいい代表ではなく分裂に追いやっただという反省があったのでね。
瀬戸山 青年劇場を旗揚げしたとき、どういう劇団にしようと思っていたのですか？
瓜生 青年劇場は8人で作ったんだ。劇団名に「秋田雨雀・土方与志記念」と付くように、僕は舞芸座を復活したいと思ったの。舞芸座は秋田先生と土方先生が作った劇団だからね。でももう二度と舞芸座のブの字も聞きたくないという人もいたから「秋田雨雀・土方与志記念」という名前だけは付けようと言って出発したんです。

瀬戸山 青年劇場の第1回公演のシェイクスピア『真夏の夜の夢』から学校公演をたくさんおこなっていましたけど、それをやろうと思ったのはなぜですか？

瓜生 まず一つは、演劇で飯を食うため！僕は青年劇場を始めるときに最初に考えたのは「演劇で何とか飯を食いたい」ということでした。学校公演である程度力を付けて、市民劇場での公演も観に来てもらえるようになりたいと。フランスをはじめとする先進国の演劇人は、ちゃんと演劇で飯を食ってる。それは国の手当、補助ですよ。フランスの演劇人たちは1%委員会というのを作ってる。国家予算の1%を文化にと。その頃の日本は0.067%ぐらいで今やっと0.1%でしょう。劇団協議会にしても演出者協会にしても、規約の中に演劇環境を整えることが掲げられている。それは本当にそうだと思う。

瀬戸山 瓜生さんが演出をする上で気をつけていたこと、大事にしていたことって何ですか？

瓜生 これは誰に教わったのかなあ……。要するに話劇だから、言葉がちゃんと伝わること。音として伝わるだけじゃなくて、言葉の言わんとする中身が伝わるためには、この台詞のどこに力点を置けばいいのか、短いフレーズでもそうだし全体的な流れの台詞の中で……というのは、演出としては当然考えますね。全体として伝えたいこと、戯曲の序破急なり起承転結なりの各部分が果たす役割みたいなことは演出家は当然考えにやいかんでしょう。僕はそもそも演出からスタートして本を書くようになったから、逆に考えればいいわけです（笑）。

みんなの意見が集約されるような劇団でありたい 集団主義に徹したい。そのルールは多数決！

瀬戸山 劇団や集団のあり方が時代と共に変わってきているのではないかと思うのですが、長年劇団を率いていらっしやった瓜生さんはどう感じていますか？

瓜生 変わってきているというか……僕が芝居を始めた頃は、集団には主宰者がいて、レパートリー選びなり何なり取り仕切る人がいたんですよ。相当な力量がある人ならばいいでしょうけど、僕は自分でそう思っていないから、劇



瀬戸山美咲（せとやま みさき）

劇作家・演出家。1977年、東京都生まれ。2001年ミナモザを旗揚げ。2016年、『彼らの敵』で読売演劇大賞優秀作品賞受賞。劇団外の活動として『埒もなく汚れなく』『始まりのアンティゴネ』（ともに作・演出）、『オールライト』（作）、『梅子とよっちゃん』『ジハード—Djihad—』（ともに演出）などがある。2019年、『夜、ナク、鳥』『わたし、と戦争』で読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。

団運営でも創造の面でも、みんなの意見が集約されるような劇団でありたいということは考えていたと思います。昔はよくケンカしたんですよ（笑）。でも大いにケンカし合えて、してもサッパリ後は忘れるような集団。集団主義に徹したいというのが僕の考え。集団主義の一つのルールっていうのは、多数決ですよ。でもね、多数決が必ずしも絶対に間違いがないとは限らない。間違ってもあるけれども、多数で決めるというルールを貫かない限り、多数者が間違ったことを変えていくこともできない、と僕は思いますが。僕が若かりし頃に好きだった言葉がゲーテの「ステルベンとストレイベン」。ステルベンは死ぬということ、ストレイベンは努力するという意味。要するに、人間は死ぬまで努力だ、でも努力する限り人間は間違ってもない。それはどういう意味かというと、努力しないやつは間違いも少ない。もつとと言うと、努力するやつは間違ってもまた努力してそれを乗り越えて進んでいくことができる！間違ったら直せばいいんです。大体70〜80%の方向が間違いないと思えば、後の20〜30%は歩み出して努力する中で開けてきたり分かってきたりするもの。これ私の人生哲学です。

瀬戸山 最後に若手の演出家へメッセージをお願いします。今と違ってたんですが、今の言葉をいただきます！なんだかすごく、ああそうだな、頑張ろうって思いました。集団を率いるのは難しいですけど、とにかく歩み出して、失敗したらやめる……ではなく、もう一回やってみればいいんだと。今日は長時間に渡って貴重なお話をありがとうございました。

演劇大学 in 函館

2018年10月29日～11月4日

会場：函館アリーナ、函館市青年センター

講師：シライケイタ、小林七緒、平塚直隆、西村洋一、和田喜夫、成井豊、前嶋のの

企画制作：一般社団法人日本演出者協会

企画運営：演劇大学 in 函館2018実行委員会、一般社団法人日本演出者協会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

後援：函館市、函館市教育委員会、公益財団法人函館市文化・スポーツ振興財団、NPO法人
函館市青年サークル協議会

協力：函館市青年センター

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」



函館での演劇大学開催は、いよいよ3年目の集大成を迎える。今回も、がっちり演劇体験、舞台体験、戯曲、発声、朗読、高校生、子ども向け、子どもと楽しむ大人向け、演劇のススメと、様々な講座を設定。

演劇大学が今年度で一区切りを迎えてしまふ函館の実行委員会にとって最大の課題は、「自主的に続けていくきっかけ作り」だった。未経験の人には作り上げる楽しみを、経験者には掘り下げ、深める楽しみをそれぞれ追求してもらい、戯曲も3年連続平塚直隆さんに講師を依頼して一貫したレベルアップを図るなど、学んだことを活かせる場を参加者が自分たちで作っていかれる、そんなエネルギーを創出するねらいがあつてのプログラムだった。しかし意外なことに、すぐに効果が表面化したのは子ども向けの講座だった。

小学生の子どもたちが、講師の前嶋ののさんと一緒に楽しく遊びながら自然と表現していく講座を終えた後、お母さんたちが「ぜひまたやってほしい」と言ってくれた。それから半年経っていないが、どんどん話が具体的にになり、現在「子ども劇団」を立ち上げたいお母さんたちによって少しずつ準備が進められており、それを地元演劇人がサポートしていく形が見えてきている。

がっちり演劇講座は、講師のシライケイタさんにお話し、全体開催に先がけての函館入り、7日間滞在での開催。地方都市で、学校に通い仕事をしながら演劇に関わる者にとって、1週間丸々びっしり演劇と向き合う機会というのにはなかなかなく、貴重な経験。参加者がそれぞれ思いを丁寧に語り合い、綴り、出来上がった濃厚な作品を成果発表で上演した。年齢も所属劇団の垣根も関係なく、ひとつの作品に取り組めたことにより、新たなつながりも生まれている。

演劇が盛んな札幌や青森が近いこともあり、「ここで演劇をする意味」を見つめる必要がある函館。ここでしか生まれない作品や演劇文化が育つていくことを祈る。

【報告】館 宗武

演劇大学 in しまね

2018年12月22日～24日

会場：ビッグハート出雲

講師：シライケイタ、小林七緒、土田英生、成井豊、和田喜夫、神在ひろみ、村中李衣

企画制作：一般社団法人日本演出者協会

企画運営：演劇大学 in しまね実行委員会

主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会

後援：島根県、島根県教育委員会、出雲市、出雲市教育委員会、公益財団法人しまね文化振興財団、公益財団法人出雲市芸術文化振興財団、チェリヴァホール、島根演劇ネット、NPO法人あしぶえ、山陰中央新報社、島根日日新聞社、朝日新聞松江総局、毎日新聞松江支局、読売新聞松江支局、中国新聞社、T S K山陰中央テレビ、B S S山陰放送、日本海テレビ、エフエム山陰、島根県ケーブルテレビ協議会

文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

旧暦11月に「神在月」を迎え、全国の神様が集まり縁結びの会議を開かれるという出雲。その出雲で、島根県初の「演劇大学」が開催されました。年の瀬迫った12月、22日からクリスマスイヴを最終日とした演劇大学は、200人を超える参加者があり、会場は講師陣と受講生の熱気に包まれました。

今回、「演劇基礎2日間」と座学「劇団を長く続けるコツ」を成井豊氏、3日間で発表まで実践する「演劇実践」をシライケイタ氏と小林七緒氏、3日間で作品を仕上げる「戯曲」を土田英生氏、座学「初心者のための演出」を和田喜夫氏、「ミュージカル体験」を神在ひろみ氏とアシスタントの松之木天辺氏、「あなたに合った絵本の読み方」を村中李衣氏に依頼。講座では、どの講師も受講生と真剣勝負ながらのキャッチボールをしながら深く掘り下げた内容と熱い空気を創出してくださいました。一方、目からたくさんの鱗を落とし新しい自分に出会った受講生は、まるで魔法にかかったような時間を体験し、今後に生かせるヒントをたくさん得たように感じました。そして、講座後のシンポジウムでは「地方の演劇のこれから」について講師や実行委員、参加者との間で熱心な討論が繰り広げられ、地方演劇に確かな未来を描くことができました。

今回の参加者は県内が8割。県外の2割は、広島、岡山、山口、鳥取、兵庫、福岡からの参加でした。年齢は8歳から70歳まで、高校生や大学生、子育てが一段落した50代以降の参加者が目立ちました。学生の皆さんのみならず多くの受講生が、地域、学校や劇団の枠を超えて繋がりを持ったことも、個々のスキルアップに加えて大きな成果だったと思います。

次回は出雲から雲南市に場所を変えて、地方の特色を出した演劇大学を開催したいと考えています。このたびは、ご尽力いただきましたすべての皆さま、素晴らしい演劇大学を本当にありがとうございました。

【報告】山根み佳



演出家・俳優養成セミナー

2018

演劇大学
in
大阪

2019年1月17日~31日

会場：ドーンセンター5F視聴覚スタジオ
講師：今村核、平石耕一、金聖雄
第3回聞き手：石原燃
企画制作：一般社団法人日本演出者協会関西ブロック
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会
文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

「えん罪」その背景を知りどう向き合うか。
第1回は、えん罪弁護士として著名な今村核氏。一旦「被疑者」扱いされると自白するまで追い込まれる捜査手法に驚愕。親兄弟、親戚、友人、職場や隣人も巻き込み追い込む。また、犯罪の立証に沿うよう自白の修正を強要。裁判では「証拠」は検察が独占。弁護側へは開示されない。不平等な裁判。ただ恐怖。今村氏は根気強く「科学的な証明」により矛盾点をあぶりだす事が使命だと言ふ。えん罪を無くすには「刑事訴訟法の大改革」が必要と提言。自白を覆す作業のなんと地道で時間のかかる事か。「自白すればおわり」なのだ。

第2回は、「NEWS NEWS」テレビは何を伝えたいか。松本サリン事件を劇化した平石耕一氏。松本美須ヶ丘高校放送部が制作したドキュメンタリーがもと。平石氏は「メディアリテラシー」欠如が生む、えん罪について強く危機感を訴える。私達はマスコミ報道を鵜呑みしがちな受け手で、冤罪に手を貸している。大々的に被疑者を特定した一次報道が行われ、各社の報道合戦が冤罪を形成し、世論をも形成。情報発信するメディア側のリテラシー、受け手としての私達のリテラシー教育の必要性を強く感じる。

第3回は、ドキュメンタリー監督の金聖雄氏。劇作家の石原燃氏が聞き手。ドキュメンタリー映像を見る。金氏のえん罪被害者への向き合い方を語ってもらふ。まずは目の前の彼らの生活やまなざし、会話など、普通の生活者としての姿を丁寧に見つめ続けること。彼らの生活状態から逆にテーマや問題点が浮かび上がってくる。彼らの日常には私たちと同様の生活がある。笑い、友情、愛情。彼らの姿から「本当の幸福とは？愛とは？家族とは？」私達の方が問われている。「獄友（ゴクトモ）」は、不思議な縁で繋がった5人のえん罪被害者のドラマだ。

今回はテーマを絞ったことで、より濃密な3回連続企画になった。司法制度はもちろん、生きる意味についても深く考える機会になった。

【報告】木嶋茂雄



国際演劇交流セミナー

2018

アルゼンチン特集
「創造のプロセスとは何か？」～既成概念を揺るがす演出を！～

2018年10月30日~11月4日（京都）、11月6日~11日（東京）

会場：KAIKA（京都）、東京芸術劇場シンフォニースペース（東京）
講師：エミリオ・ガルシア・ウェービ（Emilio Garcia Wehbi）
ゲスト：マリセル・アルバレス（Maricel Alvarez）
レクチャー&シンポジウム司会：田尻陽一（京都）、鴻英良（東京）
レクチャー&シンポジウムパネラー：あごうさとし（京都）、高山明（東京）
通訳：仮屋浩子
担当：佐川大輔、柏木俊彦、中谷和代、島村和秀、広田豹、山口浩章
制作：一般社団法人日本演出者協会
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会
協力：NPO法人フリンジシアタープロジェクト、NPO法人京都舞台芸術協会、アルゼンチン共和国大使館
文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

また、エミリオは常に鑑賞者と作品の間に具体的に統合的なメタファーがあるかを問い続けていた。曰く「作り手と鑑賞者のちょうど良い距離にある最適なメタファーを探し、鑑賞者をメタファーという迷宮の旅に誘うことが演出家の仕事のひとつである」と語る（筆者は「簡単すぎず、しかし作家の殻に閉じこもらないちょうど良い距離のメタファーを探すのに苦労した」）。
総じて、本企画は「演出」という仕事がいまいちな日本において、演出プランや鑑賞者との関係を体系的に学ぶ、絶好の機会であったと感じられた。WS参加者の能動的で活発な姿勢を見ていけば、そう思うに至るであろう。

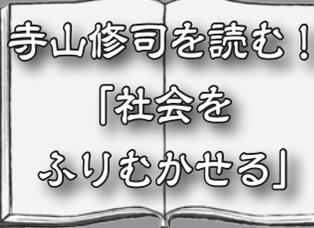
【報告】島村和秀

本WSを通して参加者は、戯曲の自然解体と各コンセプトに基づいた純粋な再構築のプロセスを体験することができた。ポストドラマ作品のなかには、演出家の奇抜なアイデアが先行して構築されるものもあるように感じる。しかし、戯曲が持つテーマや演出家のヘルメン（核にある脅迫観念）に紐づく演出要素をモーフオロジに沿って考えていけば、自然と脱構築した『ハムレット』の上演プランが生まれるようになっていた（人よって内容や見せ方が全く変わるのも面白かった）。



エミリオ・ガルシア・ウェービ（以下、エミリオ）はアルゼンチン生まれの演出家で、ギリシア神話や近代戯曲・小説を用いたポストドラマ演劇や、市街劇やインスタレーションなど「劇場」の枠にとられない先端的な舞台作品を創作する演出家である。そんなエミリオのワークショップ（以下、WS）が2018年10月から京都・東京の2会場で行われた。

日本の戯曲研修セミナー
in 福岡



2018年12月6日～15日

会場：パピオビールーム、アクロス福岡、あじびホール
リーディング演出：『血は立ったまま眠っている』中嶋さと、『毛皮のマリー』石田聖也
ラジオドラマ演出：『大人狩り』福井信介
映像上映トークゲスト：糸山裕子、小松杏里、和田喜夫
シンポジウムゲスト：下松勝人、和田喜夫、川口典成
企画制作：一般社団法人日本演出者協会
企画運営：一般社団法人日本演出者協会、日本の戯曲研修セミナー in 福岡 vol.1 実行委員
制作協力：アートマネジメントセンター福岡
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会
文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」



福岡では初の実施となった、日本の戯曲研修セミナー。第1回目の今回は、寺山修司の戯曲を「社会を振り向かせる」というテーマで読み解いていこうと、「戯曲を声に出して読んでみよう（ラジオドラマをつくってみよう）（リーディング作品創作・上演）」（映像上映トーク・寺山修司とその作品を知ろう）の4つの企画、そして最終日には各企画の発表と上演、シンポジウムを行いました。

創作企画ではそれぞれでデイスカッションの時間が持たれ、戯曲の時代背景から自身の見聞きしたことや体験談など様々な話が飛び交い、さらにそこから作品解釈についての活発な意見交換が行われました。参加者からは、実際に皆で声に出して読んでみたり、デイスカッションを行うことで、一人でそれを行う時よりもはるかに理解や考えが深まったという声が増えていきました。（ラジオドラマをつくらう）には見学の学生さんが20名程来られました。「戯曲を読み解いていく現場を見ることができてよかった」「まず戯曲を読むことの大事さを感じた」等の感想をいただきました。

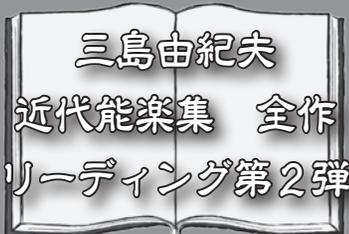
（映像上演&トーク）では、「ヴィデオ・アンソロジー」「レミング」壁抜け男の上映と、トークゲストによるトークを行い、当時の時代の熱についての話を聞ける貴重な時間となりました。参加者も混じって質問や感想などを話す時間もあり、「個人では見る機会が中々なく初めて寺山作品を観た」「上映後に話を聞けたり感想を話すことが出来てよかった」と感想をいただきました。

シンポジウム・上演発表は4時間半という長丁場でしたが、観に来られた方も参加者も、熱心に耳を傾け、質問をしたり意見を語ったりする場面もありました。

企画全体を通して、戯曲や作品に興味はあるけど機会がないという人や、誰かと話したり共に考える機会や場を欲している人の声を聞くことができ、戯曲と出合い、戯曲を読み解く事に取り組みこの企画を続けていく意義を改めて考える機会となりました。

【報告】山下キスコ

日本の戯曲研修セミナー
in 東海



2019年2月16日～17日

会場：名古屋市北文化小劇場
リーディング演出：『弱法師』三樹健、『道成寺』西尾武、『綾の鼓』神谷尚吾、『熊野』はせひろいち
アフタートークゲスト・特別講演会講師：諏訪哲史
アフタートークゲスト：渡山博崇、長谷川彩
アフタートーク司会：菊本健郎
特別講演会聞き手：木村繁
制作：一般社団法人日本演出者協会、日本の戯曲研修セミナー in 東海2018実行委員会
主催：文化庁、一般社団法人日本演出者協会
共催：公益財団法人名古屋市文化振興事業団 [北文化小劇場]
協力：一般社団法人日本演出者協会東海ブロック
文化庁委託事業「平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

三島由紀夫『近代能楽集』全作リーディング、昨年の第1弾（『邯鄲』『卒塔婆小町』『葵上』『班女』の4曲）に引き続き、今年は第2弾として残りの4曲を、4人の演出家により、リーディング上演（2作品ずつ、計4公演）を行った。

三島と同時代の三樹さんは『弱法師』を、盲目の俊徳はリーディングでなくセリフとして演技し、バイオリンの演奏やコーラス（目を灼かれ失明する場面の阿鼻叫喚）を交えて演出。若手の西尾さんが演出した『道成寺』は、鐘供養という点に着眼し巨大な衣装箆笥を「鳥籠」のような装置で表現、若い俳優の熱演が光った。劇団B級遊撃隊の神谷さんは『綾の鼓』を演出、新たな言葉の方向性を探る狙いから女優3人だけでそれぞれが複数の役を演じ、役の匿名性、多面性を表現、かなり実験的で意欲的なリーディング上演となった。劇団ジャブジャブサーキットのはせさんは『熊野』を、熊野の芸術性とそれに惚れ込む宗盛社長を軸とした解釈により演出、リーディングへのアイロニーを含めた「遊び」も交え、はせさんらしい作品仕上がりとなった。

各公演後にアフタートークが行われ、上演作品の解説、感想、解釈と演出意図と成果などについて、各作品の演出家2名、ゲスト、司会が様々に意見を交え、作品に対する理解を深めた。また、16日には、三島に造詣の深い芥川賞作家、諏訪哲史氏による特別講演会が行われ、三島が自作を朗読した肉声も披露され、三島の劇作、演劇に対する独自の視点、芸術全般に対する考え方などについての講演がなされた。

「リーディングは退屈だなんて誰が言ったの？ 誰でも楽しめる！三島DEゴー！三島、マンキツ!!」といった軽いノリのキャッチコピー（第1弾も同じ）で、より一般の観客動員を狙い、演劇関係者だけでなく、少しでも多くの人に戯曲に触れ、演劇に触れてもらいたいというこの企画、今回の動員316名は決して多い数字ではないが、内容的には有意義な企画であったと思われる。

【報告】齋藤敏明



理事会報告

◆2018年11月29日(木) 11時〜13時

◆常務理事会/場所:協会事務所
出席者:7名(委任4名)

- 常務理事(小林七緒、坂手洋二、シライケイタ、松本祐子、和田喜夫)、監事(外波山文明)、日本の戯曲研修部部长(川口典成)
 - ① 演劇大学(in函館、大阪)
 - ② 国際演劇交流セミナー(アルゼンチン)
 - ③ 日本の戯曲研修セミナー(in福岡、東海)
 - ④ 若手演出家コンクール2018
 - ⑤ 協会誌『D』21号
 - ⑥ フェニックスプロジェクト
- 《その他》2019年度文化庁育成事業、2020年度に向けて、パブリック関連演出契約書の作成について、新派勉強会

◆2018年12月29日(土) 15時〜17時

◆全体理事会/場所:芸能花伝舎1階Gallery
出席者:13名(委任6名)

- 大西一郎、小林七緒、佐藤茂紀、扇田拓也、成井豊、はせひろいち、日澤雄介、宮田慶子、流山児祥、和田喜夫、評議員(瓜生正美)、監事(外波山文明)、広報部部长(秋葉由美子)
 - ① 演劇大学(inしまね、大阪)
 - ② 日本の戯曲研修セミナー(in福岡、東海)
 - ③ 若手演出家コンクール2018
 - ④ 国際演劇交流セミナー(アルゼンチン)、国際交流活動アンケート
 - ⑤ 協会誌『D』21号、22号
 - ⑥ フェニックスプロジェクト
- 《その他》文化庁と演劇関係団体の懇親会、文化庁:戦略的芸術文化創造推進事業、パブリック関連、教育出版部勉強会、新派勉強会

◆2019年1月29日(木) 11時〜13時

◆常務理事会/場所:協会事務所
出席者:8名(委任4名)

- 常務理事(大西一郎、西沢栄治、日澤雄介、流山児祥、和田喜夫)、監事(外波山文

明)、日本の戯曲研修部部长(川口典成)、広報部部长(秋葉由美子)



- ① 理事長報告
 - ② 演劇大学(in大阪)、データのアーカイブ化について
 - ③ 日本の戯曲研修セミナー(in東海)
 - ④ 若手演出家コンクール2018、ネット配信について
 - ⑤ 国際演劇交流セミナー
 - ⑥ 2017・2018年鑑について
 - ⑦ 協会誌『D』22号
 - ⑧ 事務局報告
 - ⑨ フェニックスプロジェクト
- 《その他》総会日程について、国際交流活動アンケート、教育出版部勉強会、社会包摂部、日韓演劇センター、戯曲のアーカイブ化、ブック費について、劇場との連携事業について

◆2019年3月3日(日) 15時15分〜16時

◆常務理事会/場所:本多スタジオ
出席者:10名(委任2名)

- 常務理事(大西一郎、小林七緒、西沢栄治、日澤雄介、松本祐子、流山児祥、和田喜夫)、鶴山仁、日本の戯曲研修部部长(川口典成)、広報部部长(秋葉由美子)
 - ① 理事長報告
 - ② 演劇大学(in大阪)
 - ③ 日本の戯曲研修セミナー(in東海)
 - ④ 国際演劇交流セミナー
 - ⑤ 2017・2018年鑑について
 - ⑥ 若手演出家コンクール2018最終審査会、2017記念公演
 - ⑦ 協会誌『D』22号
 - ⑧ 社会包摂部
 - ⑨ 日韓交流センター
 - ⑩ フェニックスプロジェクト
- 《その他》『関西戦後新劇史』出版記念会、新派勉強会、戯曲翻訳部会について

部会だより

広報部 秋葉由美子

毎年2月3月の取材ラッシュ期を活用して新入部員の取材デビューを進め、各取材先でのリアルタイムでの情報発信に力を入れてきました。その結果、Facebook ページの「いいね!」は600名に到達。部員同士の交流も深まり、協会誌『D』の他にも「自分達にできることはないか?」という議論が生まれ始めています。

教育出版部 山崎哲史

教育出版部会は、4月より有志にて準備会を再開しました。演劇の「普及と啓蒙」を目的にして、これまでにさまざまな立場から持ち寄った知識や情報を検討しつつ、現在の「演劇」について広く共有できるようにまとめた、教科書的「なツールの出版の方法」について検討を深めています。まずは本年中に正式部会化を目指し、多くの方の知見をお借りしてご協力をいただきたいと思います。

新事業企画部 鶴山仁

新規事業については、すでに経験を有する俳優諸氏の現場での対応能力を更に深め、新たな可能性を開拓するためのワークショップを、公共劇場と協働して展開することなどが課題となっている。

事務局 荒川貴代

元号が新しくなり、事務局も文書の訂正等の対策に追われています。政府は「国民生活に支障を来すことないように前元号での表記も有効として受け入れる」とは言っていますが、この混乱はしばらく続きそうです。「令和には人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味が込められている」と報じられました。文化が生まれ育つためにはその環境作りが大切です。名前にふさわしい環境作りをこれまで以上に力を入れてほしいと、心から願わずにはいられません。

法務部 藤間健

2019年になり、新たな元号に変わりました。法務部では、今年度もより一層の研究をし、演出者の権利とはなにかを考え、私達の権利を法的にどのように守っていくのかを考え、皆様と情報の共有をしていきたいと思っています。取り扱った事のない事案、諸外国における演劇と法律の関係などについてもご紹介していきたいと思っています。

演劇センター推進部 西川信廣

演劇センター構想は少しずつですが進んでいます。各演劇関係団体からはセンター構想に賛同し、センター構想を国や行政に提案するときは共同で提案することに同意を得ています。先日、文化庁の参事官にもセンター構想があることを伝えました。ただ、文化庁等の関係者から、具体的に書面で提案するのはタイミングが大事と聞いているので、その辺を考えています。

※その他各部の活動に関しては、それぞれの事業報告記事をご覧ください。

あなたの心に響いた、 お勧めの戯曲を教えてください。

演出活動が続けていく中で、心を揺さぶられる作品との出会いが創作へのエネルギーに繋がった経験のある人も多いのではないのでしょうか。今号では、演出家にとって無くてはならない「戯曲」について、ご自身が強く影響を受けた戯曲や、魅力的に感じる戯曲について、誌面を通じて大いに語っていただきたいと思えます。

このページが、読者の「戯曲との出会い」のきっかけになることを願っています。

北海道 佐藤優将

(紹介者／八十嶋悠介)

僕の心に響いた、おすすめのお勧めの戯曲は、米永道裕作の『桃太郎伝説』という戯曲であります。この戯曲は高校演劇にて上演されたものであります。

僕とこの戯曲との出会いは高校演劇部時代。言葉の海を泳ぐ中で、ぐああと、自分の言葉では表現しきれない、きつとこの脚本に確かに存在するところに呑み込まれ、自分の心を大きく揺さぶられたのを鮮明に憶えています。

日本昔話としてよく知られる『桃太郎』がベースの物語。鬼ヶ島では、赤鬼と青鬼が交わることが禁じられていた。災いが起こると言い伝えられていたのだ。しかし、その中で、ある赤鬼と青鬼が禁忌を犯し、まるで人間のような姿をした子どもが産まれてしまう。

その子どもというのが「桃太郎」なのである。禁忌を犯して産まれた子どもは鬼ヶ島に災いをもたらすとされ、鬼ヶ島の島長は赤鬼にこの災いの子を人里へ捨てることを命じる。人里で育つてゆく鬼の子「桃太郎」の物語。

僕の中で素敵な戯曲というものは、読んでいる中で自然と舞台が浮かんでくる、お芝居

がみえてくるものだと思っています。そして、戯曲からところが伝わってくるものだと考えております。

『桃太郎伝説』は僕が今まで出会ってきた中でいちばんの戯曲であります。どうしてもこの戯曲でお芝居をしたくて、演劇部での脚本会議の際にこの本を提出し、上演まで漕ぎ着けることができました。

今現在、自団体において、脚本演出を担っておりませんが、脚本を書くときには先ほど述べた素敵なモノを目指しています。いつか『桃太郎伝説』のような本を書きたいです。

東北〈秋田〉 富橋信孝

(紹介者／坂本好逸)

このタイトルを見て、34年前に上演した劇団の旗揚げ公演「檸檬」を読み返してみようと、秋田県立図書館に行きました。検索コーナーで、作者の竹内純一郎(現・竹内統一郎)の名前を打ち込むと「檸檬」の戯曲が書庫にあることが分かり、早速持ってきてもらうことにしました。

私は単純に、竹内純一郎戯曲集「檸檬」と思っていました。係の方が持ってきたのは自身の劇団(シアター・ル・フォコンブル)第一回公演

用台本「檸檬」でした。しかも、手書きのガリ版刷り。なぜアマチュア劇団の公演用台本が県立図書館にあるのかという疑問より、余りの懐かしさに全部コピーさせてもらいました。

私が初めて竹内さんの芝居を観たのは、1978年に上演された劇団・斜光社公演「SF・大豊談」でした。斜光社の芝居が面白いという評判を聞き、勇んで観に行き、超満員の客席で思いっきり笑い、エネルギー溢れる芝居に圧倒された事を覚えています。1980年、当時所属していた劇団究竟頂(座長・山川三太)を退団し秋田に帰ることを決め最後に東京で観た芝居も、劇団秘法零番館旗揚げ公演「あの大鴉 さえも」でした。

劇団を結成してから今年で35年になります。が、初期の頃、竹内さんの戯曲を5本上演しています。あの時代が私に体感していたからこそその日、その場所で、その役者たちが演ずることを前提にして書かれた戯曲を、演出することが出来たのかもしれない。そんな素敵な戯曲と、これからの出会えるのか? 戯曲を書くことが出来ない私は、これからも(戯曲探しの旅)を続けるしかありません。

中部・甲信越〈新潟〉 石川直幸

(紹介者／市井優)

リレー形式で私にもバトンが回ってきた。テーマは「戯曲」であるという。

大学時代は演劇研究部に入っていたので、当時は半分強制的に(なにしろ「研究」部だ(笑))様々読んだ。せりふの時代、テアトロ、悲劇喜劇……。シビれるような名台詞、発明のごとき戯曲構造、巧みな伏線、一部の隙もない繊細かつソリッドな会話劇、様々な戯曲が脳裏をよぎったが、私はここでそと小川未玲氏の「お勝手の姫」を挙げる。

前述したとおり私は大学から演劇を始めた人間だが、当時の演劇部の一番最初の公演がこの戯曲であった。仮に、戯曲を設計図に例えるならば、「お勝手の姫」は非常に親切的な設計図

明の入った図面である。句読点やト書き、カッコ書きが実にかゆいところに手が届く挿入されつぶり、読んでみると「宿泊者が選ぶ! おもてなしが素晴らしい日本の旅館100選!」にでも泊まったような感覚に陥る。ベテラン女将にサアサアこちらへこちらへと手招きされているようだ。ストーリーも実にウェルメイドであるので、初めて演劇をやった当時の私としてはただただ素直に面白かった。幸せな出会いだったと思う。なお、戯曲は氏のホームページにより全文公開されているのでぜひ読んでみてはどうだろうか。また、最近読んだもので強く影響を受けたものは「プルーフ/証明」(原作: デヴィッド・オーバイン・翻訳: 谷賢二)や「太陽」(前川知大)。どちらも親しげで開かれた入口をもちながら、その懐の深さたるや、人類が挑み続けている哲学のように広がっている。そしてなにより美しいのだ。ぜひ読んでいただきたい。

関東〈東京〉 坂田俊二

(紹介者／菅田華絵)

私のささやかな演劇人生の中で出会った「心に響いた戯曲」をご紹介します。

まずは「私のかわいそうなマラート」。

この戯曲とは、劇団の養成所時代、渋谷にあった大誠堂書店で出会いました。大誠堂書店は、確か六階建てのビルで、専門書などが多くあり、その頃の私には唯一、戯曲と出会える場所でした。

作者はアレクセイ・アルブゾフ、訳者は泉三太郎。おそらく皆さんご存知の戯曲で、お好きな方も多いのでは。

三部の対話劇。登場人物は男二人、マラーとレオニジク、そして、女二人、リカ。舞台はレニングラードのアパートの一室。

第一部は、第二次世界大戦の最中、独軍に包囲されたレニングラードの焼け残ったアパート。そこで三人は出会い共同生活を始める。

第二部は、終戦の翌年。三人は再会する。第三部は、それから十年程後の三人。

戦禍を生き延びた三人の夢と挫折、そして愛。生きる事の切なさ胸を締め付ける名作です。

養成所の同期と、四畳半のボロアパートで何度も読み合わせをしたのを覚えています。会話劇の楽しさ、また、言葉に出来ない気持ちの大切さを教えて貰った一冊です。

そして、もう一つ触れておきたい戯曲、それは、1981年、男性週刊誌「平凡パンチ」に掲載された、つかこうへいさんの「いつも心に太陽を！」。戯曲全文が週刊誌に掲載される事などそれまでにはなかった事ですし、私にとってはあまりにも衝撃的な出来事でした。「いつも心に太陽を！」そして、その後の「蒲田行進曲」は、私の長年の演劇の教科書です。

東海〈愛知〉 川村ミチル

(紹介者／西尾武)

締め切りをとうに過ぎて、この原稿を書いている正に今、ある戯曲と格闘、七転八倒中のため、正直、他の戯曲のことなど考えたくもないという余裕の無さなのです。

戯曲にはプレヒトやシエクスピアなど、時間も民族の違いも超えて我々の心に響く普遍性をもっている名作も多いが、「今」を演劇人の端くれとして生きている私と同時代性の中において生み出された、強いメッセージを感じるものもある。そんなものに出会ってしまったとき、私は犬がキャンキャンと尻尾をまくように、演劇人を名乗ることすら恥ずかしく「ボーっと生きてすみません」と土下座したくなる。とりわけ、坂手洋二氏、永井愛氏、篠原久美子氏の戯曲は、作風はそれぞれ違うものの、ある種のストレートさと、演劇的仕掛け、関係式の中からあぶりだされていく人間のおかしみを描き、観客の想像力を刺激し、ほんとにこれでいいのかと問いかける深い戯曲が多いため、積極的に読むようにしている。冒頭の戯曲とは、坂手洋二氏が渡辺美佐子さんを主演に書き下ろされた2005年初演

「いとこ同志」である。なぜ同志の志は「土」でないのか、登場人物は実在するのか夢なのか、1970年という時代は何だったのか、我々表現者にとつての終着駅とは？ 稽古場で悶々としている。何のことだかわからない方は、ぜひ戯曲を購入して読んでいただきたい(あ、こないだ燐光群の公演会場で、半額くらいで売ってました)。そしてアホな私に、こういうことなんじゃないの？とレクチャーしてください。でもこの格闘の時間こそ、つらくて面白いのも事実。

関西〈兵庫〉 島守辰明

(紹介者／岩崎正裕)

演出の前に俳優として「三人姉妹」を読んだとき、チェーホフは「読んでわからない戯曲」だった。もちろん大筋の物語はわかるものの、何を描いた戯曲なのか、これは役者として芝居の状況の中に入って初めてわかる本だったのだ。それまでこのような経験をしたことがなかった。一つのこと「おや」と気付くと、とつぜん、他の場面、他のセリフ、他の状況が、まるでドミノ倒しのようにパタ、パタ、パタと繋がっていく。これは文字を追っていてもわからない。裏読みだけを頼ればとんちんかんな方向へ嵌ってしまう。決して文学としてだけでは理解できない。まさに演劇のための戯曲だと痛感したのだ。

さらにロシアで学び、そのセオリー、戯曲の分析方法が今まで教わったものとは真逆に近いと思うほど方向の違うものだった。一口で説明するのは極めて難しいもの、やはり「文字を追うだけでは演劇にならない」という基本がさらに論理的であり、俳優の生理を使って読むというアプローチが明確だったのだ。それは、現在私が新国立劇場演劇研修所やピッコロ演劇学校で毎年教えているものである。「演劇は俳優の芸術である」と明確に唱えるロシアならではのセオリーとも云える。これに影響を受けたアメリカの戯曲などにもこれは通じる流れが見て取れる。

近代演劇の成り立ちには諸説ある。ロシアでは近代演劇の流れを作り出したのは紛れもなくチェーホフだと云われている。文字通り「演劇としての」演出論、戯曲論には、不条理演劇誕生のきっかけともいわれるチェーホフの「あえて文字に書かないが、しっかりと描いている」という作劇法には、まだまだ学ぶものがあると考ええる。

中国・四国〈愛媛〉 本坊由華子

(紹介者／石田千晶)

私は古典戯曲から現代口語演劇など、様々な戯曲を演出した。ここで改めて紹介するほどでもない知名度の高い作品だが、三島由紀夫の「班女」を紹介する。

さて、本戯曲を紹介する前に私が良い戯曲だと感じる戯曲の定義をお話する。それは二つある。

一つは、解釈の余地があるということだ。戯曲とは、演出家や俳優によって演じられるものであり未完成の状態である。戯曲だけで演劇は完成しない。つまり、演出家・俳優が介入する余地があるということでもある。予め正解が示された戯曲は私にとって演出し甲斐がない。ある程度の道筋は必要だが、言葉の余白や関係性のウエイトを埋めるのはあくまで稽古場の判断だ。「班女」に限らず三島作品全てに共通するものだが、三島の言葉は強靱であるにも関わらず読者の存在によって大きく変化する。細部のニュアンスだけではなく、作品の核となるテーマの解釈すら幅を持たせている。私は今まで様々な戯曲を読んできたが、正解が解明できない戯曲に出会ったのは初めてだ。「班女」の稽古期間中は稽古をすればするほど、新たな正解を見つけ出した。俳優も演出家も議論が増し、多様性を含んだ上演になったと思う。さて、優れた戯曲の定義、二点目だ。私は無駄がない戯曲が好きだ。台詞やシーンの配置に必然性が保たれた戯曲が優れていると感じる。三島戯曲はどれもそうだが、想像的な

余白を多く残しながらも無駄な言葉は一言もない。日常言語のみならず非日常空間を彩るポエティックな劇文体にさえ、そういった無駄が見られない。

九州〈大分〉 時枝豊

(紹介者／ルーシー・ラヴグッドウィル)

演劇をやるということを意識しはじめてからはじめて読んだ戯曲が、寺山修司の「人力飛行機ソロモン」でした。1970年新宿で上演され同時多発的に街のあちこちで演劇が行われた市街劇です。

戯曲とは舞台を作る上での設計図のようなものだと聞いていました。ですが、これは、どう組み立てたら「演劇」として成立するのか、経験の浅さもあつてまったく理解できず、「市街劇」というまだ見ぬかたちにも戸惑いました。一見、会話にもなっていないように見える言葉の応酬、ト書きに書かれた蘊蓄(うんちく)といくくなるくらいの時代背景や思想についての記述。でもそれらはとても美しく魅力的な言葉でつくられていて、読んでいてだけでもどきどきしてしまふ。俳優はこれを背負い、しかしそれを説明する機会は台詞上には見る限り表現されていないとしたら……。

これをどうやって伝えるの？ この物語はどこへ向かうの？ これはそもそも物語なの？ ト書きの行間をも読みつくそうと、積み木を積んだり崩したりするような気持ちで夢中で読み進めたことを記憶しています。

それから数年後、松山で上演された「人力飛行機ソロモン」に幸運にも関わることができました。上演を終えて、やはりあれは翼の設計図であつたと実感する一方、設計図のどの部分かどうなつてこの美しい翼を作ることができたのか、ということは、人力飛行機が飛び立つてもやはり私にはわからないままでした。

東北被災地の舞台芸術家を支援する事業

フェニックスプロジェクト Vol.9 『3.11を風化させない』

～あれから3000日。今何が起き、何ができるのか?～

報告＝伊藤み弥（仙台在住）

【概要】

2019年3月23日(土)～24日(日) 本多スタジオ
原発事故後のフクシマを見つめ続けるルポライター吉田千亜さんの
リポートを聞き、グループで演劇を創作するワークショップ、
岩手・宮城の現状を聞く報告会、シンポジウムを開催
登壇者＝吉田千亜、くらもちひろゆき、伊藤み弥、流山児祥
ゲスト＝大久保鷹 実行委員＝佐藤茂紀、大西一郎

劇的想像力で3.11を旅するワークショップ

旅はそれぞれの（あの日）を話すことから始まりました。参加者の語りにはそれぞれ確かな（実感）があり、見学していた私の中にもくっきりとした光景が浮かんできます。「伝えようと思っただけでも、皆さんのカラダがすでにそうなっていたからだね」とワークショップ講師の佐藤茂紀さん（福島在住）。東北から遠くにいる人たちも個人レベルでは決して風化していかないことがわかり、ハッとしました。続くワークショップには私も参加することになり、傍観者からいきなり（当事者）へ、想定外はどこにでも潜んでいるものです。

課題は吉田千亜さんが取材した或る消防士のエピソードを劇化すること。グループ

に分かれ、被曝した消防士、妻、子供2人の設定で10分間のシーンを作るのですが、そこに大久保鷹さんが即興的に入り込むという（想定外）が起る……途中に暮れる一同ですが、約2時間の試行錯誤を経て、怒涛の中間発表。各チーム



△ワークショップ発表の様子

に対し茂紀さんは瞬時に鋭いコメントを發します。「話を再現するんじゃない、（劇化）するんだ」「想像には具体的な理由がある。妄想じゃない」なるほど、目指すところは（実感のある身体）なのだと思いました。

さて、翌日の公開発表は混迷しました。多くの参加者が一晩考えすぎて情報過多、言語過多になってしまったのです。もちろん、目指すべき身体に行き着くには時間をかけて稽古を重ねるしかないのですが、それにしても身体をその場に投げ込むまでに至らなかったのは、彼ら自身が抱えていた（語りにくさ）（当事者問題）がカラダに表れたものではなかったか、と今になって思います。難しい課題でしたが、その挑戦はじわりと身体に残りました。私たちはいつだって旅の途上なのです。

吉田千亜トーク

千亜さんの報告は、隣県に住む私にも衝撃的でした。（風評被害）という言葉で汚染や被曝の事実が隠蔽されること、政府は来年のオリンピックまでに汚染土の詰まったフレコンバッグやモニタリングポスト、何より（避難者）と（人のいない町）をな

くそうと、キチガイ沙汰の施策を強引に押し進めていること等々を聴き、私は自分の不勉強を恥ずかしく思いました。



△吉田千亜トーク

彼女が避難者の言葉と気持ちを丁寧に汲み取り、冷静に発信していますが「実は（切り取る）ことに罪悪感を覚えながらやっています」と吐露しました。その言葉を受け、茂紀さんは参加者に「創る側にも（覚悟）が必要ですよ」と言いました。お二人は巨悪と戦う同志のように思われました。

報告／被災地と演劇 岩手の被災地と関わる演劇活動のいくつか

くらもちひろゆきさんの住む盛岡は、県庁所在地かつ沿岸部への交通の要衝として支援活動の主要拠点となりましたが、内陸にあるため（被災地）とは言い切れない、もどかしさのある街のように私の目には映っていました。彼は時系列で演劇活動の変化を追いながら、宮古市立田老第一中学校での演劇ワークショップについて報告しました。その中で強く印象に残ったのは、中学生がすし詰め状態の避難所の様子や、遺体と対面した家族の様子を（自発的に）演じていた姿です。軽率な言い方かもしれませんが、それでも津波と共存してゆく土地に生きる若者たちの靉々を見たように思います。千亜さんの「演劇には（言にくいさ）を越えて行ける力がある」という言葉がこだましました。

また、くらもちさんは明治三陸津波と昭和三陸津波を引き合いにし、「津波の8年後には戦争が起こっています。今年がその年です」と懸念を示しました。昨今の政府の不穏な動きを見ると、迷信とは笑い飛ばせ



△参加者の皆さん

震災で生き残った私たちは、この不安で不穏な時代に何をすべきなのか、どうしてゆくののか。それを改めて問われる二日間でした。

ワークショップ発案・指導 佐藤茂紀より

このようなワークショップを行った動機を一言だけ付け加えたい。
前回、福島から参加した高校生の一人が「私たちは福島の高校生であるという謎のプレッシャーを感じながら震災をテーマとした演劇を作っています。」という言葉が発した。この場の福島の高校生たちはそれに共感し頷いた。よくよく考えてみれば、例えばフクシマを、演劇で表現するのに当事者にこだわる必要などない。演劇と語り部は似て非なるもの。語り部はその語り部べき想いを当事者としてのある種特権的な身体を持って表現する。しかしいつか死に絶える。しかし演劇は当事者ではない人間がどのような事柄も自分事として表現するまた別の特権的な身体を獲得し、表現し続ける可能性を持つ。そんな演劇の原点を多くの皆さんと共有したい。それが今回の出発点である。

演出者と法律

第五回

「休憩はとれていますか？」

法務部長 藤間健

新しい年度を迎え、そして新しい元号になりました。皆さまにおかれましては、作品作りに、本番にと、ご多忙のことと思います。

さて、演出者と法律では、これまで、知的財産法から、完成した作品に対する著作権関係を、そして民法から、契約全般とは何かをみてきました。

今号では視点を変えまして、舞台創作の現場では労働基準法は適用されるのか。舞台制作の現場にいる演出者、俳優は「労働者」に当てはまるのか。そして休憩ほどのくらい取らなければいけないのかなどについて概観していきたいと思えます。

労働基準法は適用される？

はじめに皆様も耳にしたり、目にしたりしたことのある「労働基準法」（以下、労基法）とはどんな法律でなんの為の法律なのかをみていきます。

日本国憲法第27条第2項の規定に基づき、1947年（昭和22年）に制定されたこの法律は、労働条件に関する最低基準を

定めた法律であり、労働契約関係について規定する最も基本的な法律です。数ある労働に関連する法規の中でも、最も重要な法律です。どのような事を定めているのかというと、労働者の待遇全般が、具体的には労働者の労働時間は原則として上限を1日8時間、1週間で40時間とすること（労基法32条）や、休憩（34条）、休日（35条）、時間外・休日労働（36条）等についてです。では、この法律は舞台創作という特殊な空間では適用されるのかという疑問についてですが、労基法の適用範囲に関しては、国家公務員等の一部を除いて、日本国内のすべての労働者に原則適用されます。これには、舞台業界も特別ではなく含まれると考えることができます。

「労働者とは」

演出者や俳優などの芸能に関わっている人に労働者という言葉は馴染みのない言葉ですが、労基法にいう労働者に当てはまるのかを見ていきたいと思います。当てはまれば労基法の適用を受けることになりま

す。労基法では、「労働者」とは職業の種類を問わず、事業又は事務所（以下「事業」という）に使用される者で、賃金を支払われる者をいう（9条）と規定されています。すなわち「労働者」の要件とは、①使用者に「使用される」こと、すなわち使用者の指揮監督下で働くこと。②労働提供の対価として賃金の支払いを得る者。であると考

えられます。しかし近年、働き方が多様化し、要件に当てはまらない働き方も増えてきています。

また判例は、労働者に該当するか否かを

①仕事の依頼、業務従事の指示等に対する許否の有無（業務遂行上の指揮監督の有無、勤務場所・勤務時間に関する拘束性の有無、労働提供の代替性の有無）、

②報酬の労働対償性に着目した上で、事業者性の有無や専属性の程度等を加味して総合的に判断するとしています。（横浜南労基署長（旭紙業）事件・最一小判平8年11月28日）

では演出者や俳優はどうでしょう。多くは請負事業者や業務受託ですが、他人の指揮監督下で働いているわけではない請負事業者や業務受託者は原則として「労働者」にはあたらないと考えられます。しかし、契約書の表題が「請負契約」や「業務委託契約」になつていても「労働者」になる可能性があります。それは労働者にあたるかどうかの判断では、契約の名目ではなくその労働実態が重要になるからです。その為、個別判断をしていく事になります。

では以下で、個別に見ていきましょう。演出者や俳優は「労働者」であるのかについてですが、状況も個々に違いますので、例を3つ出して考えていきます。（Ⅰ）自ら独立して劇団や事務所を設立している人。（Ⅱ）劇団や事務所に所属している大御所。（Ⅲ）劇団や事務所に所属したばかりの新人。上述してきた基準と照らしみると、（Ⅰ）は、少なくとも実質上は経営者であると考えられますので、「労働者」には当たらないと考えられます。（Ⅱ）については、仕事の選択の自由や所属している劇団や事務所からの指示に対する諾否の自由や職務遂行上の裁量等は認められていないケースが多いようですが、もしそれが認められているならば、「労働者」ではないと判断される可能性が高いと考えられ

ます。これに対して、（Ⅲ）は「労働者」であると考えることが出来ます。

休憩はどのくらい？

「労働者」であるとなった場合には、労基法の適用対象になりますが、例えば、休憩はどのくらい取ればいいのかというのとても大切になります。舞台創作の現場ですと、熱中しすぎて休憩を取り忘れてしまふ事も多いですが、労基法では以下のような規定が置かれています。労基法34条1項では、使用者は、1日の労働時間が6時間以内の労働では休憩を付与する義務はなく、6時間を超え、8時間以内の労働の場合は少なくとも45分の休憩を付与しなければならず、8時間を超える労働の場合は少なくとも1時間を超える休憩を付与しなければならず、どうしても作品づくりに熱が入つてしまい休憩がとれなくなる事がありますが、適度な休憩をとり効率的な舞台創作をして頂ければ幸いです。

日本演出者協会は、正会員として公益社団法人日本芸能実演家団体協議会（芸団協）へ加盟しています。創作にあたり、気になることが生じた際には、芸団協又は法務部にいつでもご相談下さい。

引用文献

労働法 第二版 新谷眞 弘文堂



ブロック紹介 〜東海ブロック〜

日本演出者協会は全国組織の為、東京の本部事務局の他に、地域での活動の拠点となる「ブロック」が存在します。

その地域外で活動する人たちには知られていない各ブロックの魅力を、順次ご紹介していく「各ブロック紹介」。



トップバッターは、東海ブロックです！

東海ブロックの最大の特徴は、「長」を持たないことだろう。やれ支部長だ、ブロック長だという存在を、2014年を境に「皆で持たない」と決めたのだ。当初は責任の所在云々とか、最終決断は誰が?...などの老練心もあったが、それよりも「長」にいつい押し付けたり、組織が硬直化するのを嫌っての、満場一致の選択だった。現在は運営委員として十数人が名を連ね、運営上事務局(正式には「連絡係」)として斎藤敏明氏に就いてもらっているが、いつの間にか、みなみ津姉さんが事務してたり、東海ブロックの大御所、木村さん、菊本さんも、新米の西尾君も年齢差、経験は関係なくフランクに仕事を。事業ごとに実行委員が構成され、誰でも手を挙げれば参加できる。なんとも自由で敷居が低い。今のところ「長」不在の不自由さは感じることとはなく、事実、2月の戯曲研修セミナーでも「三島由紀夫近代能楽集」の2年越しの全8作品リレーディングを、盛況のうちに終えることができた。

イベントのない間は、2か月に一度、(原則、奇数月の第2月曜)に例会が持たれ、気楽に集っている。幽霊的な奴もいるし、遠方の人間の参加し辛さ(主に名古屋市内で開催、ブロックのエリアは愛知、岐阜、三重、静岡)を問題にしつつも、さくばらんを集いを継続させている。きつと都市の規模にも恵まれているのだろうか、ちゃんと顔と顔を合わせてこそフラットな空気は生まれる。

ここからはあくまで私見だが、かつて中津川での複数年にわたる「演劇キャンプ」や三重県津での「演劇大学」などユニークな取り組みを重ねてきた我々として、そこで培った「顔が見える実行力」こそが、東海ブロックの底力ではないかと思っている。近年ではやはり会議から発動した劇作家協会東海支部とのコラボ企画「木村さんと鈴木さん」なども記憶に新しい。思えば、東海在住の理事として依頼されたこの文章を、チェックしても「上司」さえ存在しないのだ。演出者の多くは、自分の業に戻れば、欲しくもないヒエラルキーを身に纏ったり、運営の頭にならざるを得ない存在。ブロック企画の時くらい、やりたこと、言いたいことを自由に放つ方がいいのかも知れない。(文責:はせひろいち)

理事・役員一覧

- 【理事長】 流山児祥
- 【副理事長】 坂手洋二、宮田慶子
- 【常務理事】 大西一郎、小林七緒、シライケイタ、西沢栄治、日澤雄介、松本祐子
- 【理事・事務局長】 和田喜夫
- 【理事】 鶴山仁、菊川徳之助、鴻上尚史、佐藤茂紀、扇田拓也、田中孝弥、成井豊、西川信廣、はせひろいち、ふじたあさや、山田恵理香
- 【監事】 外波山文明、福田悦雄
- 【評議員】 瓜生正美、貝山武久、栗山民也、中村孝夫、福田善之

事業担当一覧

1. 演劇大学部 【部長】 小林七緒(北海道) 齊藤歩(北陸) 井上ほりりん、黒田百合(東北) 佐藤茂紀、高橋純、新田満吹雪、ビュン(関東) スズキ拓朗、土田英生、成井豊、西垣耕造、日澤雄介(東海) 鹿目由紀、はせひろいち、平塚直隆(関西) 岩崎正裕、木嶋茂雄、高橋恵、山口浩章(中国) 坂井陽介、和田喜夫(四国) 岡田敬弘、吉本ちか子(九州) 大場久路、清末典子、五味伸之、山田恵理香
2. 国際部 【部長】 佐川大輔 【副部長】 広田豹 【担当理事】 シライケイタ(北海道) 前田透(北陸) 岡井直道(関東) 柏木俊彦、公家義徳、坂手洋二、佐々木治己、篠本賢一、島村和秀、杉山剛志、扇田拓也、林英樹、平松れい子、前嶋の、眞鍋卓嗣、山上優、遊貴まひろ(東海) 前川達次郎、丸知垂矢(関西) 坂手日登美、島守辰明、田中孝弥、中谷和代(九州) 石田聖也、五味伸之、山下キスコ、山田恵理香
3. 日本の戯曲研修部 【部長】 川口典成(北海道) 田中春彦(東北) 大河原準介、渡部ギユウ(関東) 岩崎聡子、

一般社団法人 日本演出者協会

事業担当者名簿

2019年3月末日現在

- 蔵人、黒川逸朗、黒澤世莉、小林拓生、坂手洋二、篠本賢一、外波山文明、中村孝夫、林英樹、日澤雄介、平野智子、丸尾聡(東海) 岡田一彦、菊本健郎、齋藤敏明、はせひろいち、みなみ津姉(関西) 井之上淳、笠井友仁、金子順子、神澤和明、菊川徳之助、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、山口浩章(九州) 石田聖也、五味伸之、田村さえ、山下キスコ、山南純平
- 4. 若手演出家コンクール 【部長】 西沢栄治 【制作担当】 三村里奈(関東) 大西一郎、扇田拓也
- 5. 広報部 【部長】 秋葉由美子 【副部長】 栗原秀一 【担当理事】 大西一郎(関東) 五戸真理枝、篠崎光正、篠本賢一、中村ノブアキ、野月敦、廣岡悠那、富士川正美、藤間健、緑川恵仁
- 6. 教育出版社部(関東) 黒澤世莉、坂手洋二、佐々木治己、篠崎光正、篠本賢一、外波山文明、成井豊、日澤雄介、ふじたあさや、松本祐子、山崎哲史
- 7. 新事業企画部 【部長】 鶴山仁(関東) 宮田慶子
- 8. 演劇センター推進部 【部長】 西川信廣(関東) 鴻上尚史、坂手洋二、外波山文明、中屋敷法仁、流山児祥
- 9. 法務部 【部長】 藤間健(関東) 鶴山仁、小林七緒、西川信廣
- 10. 日韓演劇交流部 【部長】 シライケイタ(関東) スズキ拓朗、村井雄
- 11. フェニックスプロジェクト 【部長】 大西一郎(東北) 伊藤み弥、こむろこうじ、坂田裕一、佐藤茂紀、渡部ギユウ(関東) 菅野直子
- 12. 観劇案内 【部長】 遠藤栄蔵(東海) 金子康雄
- 13. 事務局(本部) 秋葉舞滝子、荒川貴代、上田郁子、清水直子(東海ブロック) 金子康雄(関西ブロック) 木嶋茂雄、山口浩章、山本つづみ(九州ブロック) 石田聖也、大場久路、五味伸之、田村さえ、山田恵理香

新入会員紹介

2019年3月末日現在(希望者のみ掲載)

☆林 洋平(はやし ようへい)



1977年3月13日
生まれ。京都府出身。
大阪芸術大学舞台芸術
学卒。卒業制作公演では、
演出部門で学部長賞を受賞。
卒業後上京し、俳優として
テレビ、映画、舞台に出演。
俳優として活動する
かたわら、2009年より
演出家、演出助手として
も活動。小劇場から大
劇場までさまざまな作品
に関わる。最近では、
ミュージカル『テニスの
王子様』や『ハイキュー!!』
に演技トレーナーとして
関わっている。演劇、
俳優の地位向上をめざし、
演劇の力を使ってさまざま
な活動をおこなう。

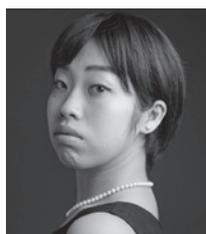
☆西部 守(にしへ まもる)



1986年1月7日
生まれ。愛知県碧南市
出身。神奈川県多摩区
在住。劇団民藝所属。
2017年劇団民藝にてエ
リ・クライエム作『負傷者
16人』を演出。2019年
7月ロナルド・ハワード
作『The Fandymans』
演出予定。現在、演劇
鑑賞会の公演を回りなが
ら、7月の公演準備に
奔走中です! 『テイキン
グサイド』『戦場のピ
アニスト』など数々の
作品を観てきたR・ハ
ワード

ドに初挑戦のため、不安と興奮を持ち進んでいますが、未熟者のため幅広い演出を学びたいです! 稽古を拝見させて頂ける御心の広い方や、演出助手が不足しているという方いらっしゃったらご一報下さい! 連絡お待ちしております!

☆朝日山裕子(あさひやま ゆうこ)



1989年生まれ。
島根県出雲市在住。
国立音楽大学演奏学
科声楽専修、卒業。
栃木県足利オペラ
リリカ研修所にて
学ぶ。2012年に「雲
の劇團雨蛙」を立ち
上げ。その後、おふ
いす300渡辺えり
氏のアシスタント、
地点『光のない』、
スポーツ劇『音楽隊、
大駱駝艦夏季合宿野
外公演』夏の友、演
劇実験室『万有引力』
身毒丸(女力士役)、
幻想市街劇『田園に
死す』三沢篇(女力士
役)、その他子ども
向けのオペラコンサ
ートなどを経て現在
に至る。主な演出歴
は、寺山修司作『星
の王子さま』『コメ
ット・イケヤ』『観
客席』『大山デブコ
の犯罪』など。利賀
演劇人コンクール
2017では三島由紀
夫『近代能楽集』熊
野』で奨励賞・観客
賞受賞。第一回しま
ね演劇コンクール中
浦食品賞受賞。

☆廣岡悠那(ひろおか ゆうな)

神奈川県山奥出身。
同級生16名、肩身の狭い小・中学時
代を送る。大学在学
中の2014年、劇団
民藝演技部入団。20
18年11月、劇団民
藝演出部退団。そ



の後「三井不動産ビル
マネジメント劇と暮ら
しプロジェクト」を
経て、仲間と共に劇
団「東京楽特区」を
設立。総合芸術監督
の録音。好きな音楽
は谷山浩子、電気グル
ーヴ、ナゴムレコード
系、平沢進。ドイツ
表現主義の映画作品
が好き。劇団名の「
楽特区」という言葉
はシンガポール旅行
中の滞在先、ゲイラ
ン地区から着想を得
ている。現在冬季公
演に向けて「宮沢賢
治と満州国」につい
ての戯曲を「伝記物
の皮を被った物語」
を目標に執筆中。

☆金築秀幸(かねつき ひでゆき)



劇団レンズ装置代
表、主に演出を担
っています。劇団レ
ンズ装置は、島根
民会館で行われた
ステージリエイター
講座で課題として
使用された、ユニ
フォーム作『ちゃん
ぼん』を実際に公
演してみよう、と
いうのがきっかけ
で2017年から活
動をはじめまし
た。それから、鄭
義信作『蟹を食
う』を、韓流のタ
ベというイベン
トの中で上演し、
島根演劇コンク
ールにも参加し
ました。地方では、
仕事をしながら
演劇に関わる方
がほとんどで、
作品を作るのが
大きな問題です。
地域で求められる
作品とはどんな
物だろう、今い
る場所のできる
演劇、求められ
る演劇って何だ
ろう、と考えな
がら、活動して
います。

☆野月 敦(のつき あつし)



埼玉育ち。青山学
院大学でコミュニ
ケーション学を専
攻するが肌に合
わず、サポ
ーティングに
入る。グリ
ゴーリ・コー
ジツエフ監督
の『ハムレット』
(1964年・ソ
連映画)を観
て、演劇に興
味を持つ。そ
れをきっかけ
に演劇・戯曲
の映像化作品
を研究する狩
野良規教授のゼ
ミへ。映画を
通じて演劇の
面白さを知
り、大学在学
中の2018年
春、劇団民
藝に入団。縁
あって篠本賢
一さんの主宰
する遊戯空間
の公演『喪服
の似合っ
エレクトラ』
のお手伝い
に。外部の人
々との交流に
触発され、民
藝を一年足ら
ずで退団。今
春、同じく民
藝を辞めた廣
岡悠那、文学
座研究所を
卒業した小河
智裕、根本啓
司と「東京楽
特区」を設立。
代表を務める。

《退会》 福正憲 大杉祐 植村達雄 石狩

真佐夫 今村好希 鈴木稔雪

西菜々重 河口琢磨

《計報》 高取英

日本演出者協会の
Facebook ページは
こちらから!



または

日本演出者協会

検索

神田川沿いの**ぼろ**アパートに棲みついで23年、住民の大半がアジアの人達になった。アジアを旅する演出家に相応しい棲家である。去年8月から今年2月までの国立台北藝術大学客員教授生活を終え、その前の滞在を含め8カ月ぶりに台湾から帰国した。

北藝大では教授らしいことは一切せず、やりたい放題の、学生目くクレージー導演：流山兎爺爺であった。強靱なカラダとコトバを持つ若者たちの血を吸い「破壊と創造＝演劇の自由さ」を再体験し過激な演劇青年に戻れた半年であった。就任時、北藝大は自由に学べる環境だが学生も教師も既成概念や常識に捉われて「演劇の自由さ」を忘れて見えているように見えた。教授会で様々な社会的提言をした。学生には「芝居は何をやってもいいんだ！」と煽動した。社会と繋がる演劇の意味を徹底的に討論した。稽古は愉しく大胆に！他者と一緒に発明してみろ！と言い続けた。

北藝大版『十二夜』を4カ月間、歌唱、振付稽古を贅沢に重ね音楽劇に創り上げた。ラストは舞台と客席全体を使いノンストップで8分間ぶっ倒れるまで踊り続けた、その

間に装置は全て消えた。役者たちは靴を脱ぎ外へと消えて行く。カーテンコールは野外。『十二夜』は8ステージ超満員札止め2500余の観客を集める前代未聞の大ヒットとなる。学生演劇にも拘らず新聞トップに取りあげられ藝術雑誌に劇評が掲載、某劇場からロングラン公演の話まで舞い込んだ。また、村上春樹の短編にインスパイアされた流山兎演出家コース6人の「学内初」の発表公演も「ビル全体を使った大掛かりな野外劇」を含む自由で大胆な実験公演となった。全作品に台湾の歴史と社会と「若者たちの現在の心象」が浮かび上がった。貴重な体験を71歳の老演出家に与えてくれた北藝大と学生達に多謝。



▲流山兎演出家コース発表公演 野外劇『冬の博物館』



▲台北藝大戲劇学系2018冬公演『十二夜』

福島の演劇人との交流企画「真船豊と旅するプロジェクト」は3月リーディング上演を終え2021年春音楽劇『**馳**』上演に向けて様々な寄り道をしながら楽しい旅を続けている。中高年劇団：シアター RAKU は5月『女の平和』@新宮芸術祭招聘公演、OURシアターとの4年目のコラボ『嫁粧一牛車』は8月～9月@台中国家歌劇院、@台北水源劇場公演と、今年も台湾の旅は続く。

- ▼大正、昭和、平成と3つの時代を生きてきた瓜生さんの言葉を、令和の初めに皆さんにお届けできるのが感慨深い。多くの人が平和に芝居を続けられる、そんな時代を築いていけたら。(秋葉由美子)
- ▼益々拵げて行きたいと願う今日この頃。広報部も関東以外の部員も出て来て欲しいと願いつつ。お待ちしております。WEBでの打ち合わせの日も近いかも。(栗原秀二)
- ▼新年号は演劇に風が吹く前兆だと考えたい。演劇が持つ人間力育成実績が社会や教育に貢献する時代になるよう『D』を編集していきたい。(篠崎光正)
- ▼今春、生まれて初めて赴き、一草一木が放つ神々しさに胸を打たれた出雲から新たに協会に入ってきた方々が。活動の場所は離れていますが、いつかお会いしたいな。(緑川憲仁)
- ▼今回の「演出者と法律」、演出者は労働基準法の適用対象か、というテーマで書きました。今後も様々なテーマに挑戦していきます。(藤間健)
- ▼広報部員になって一年が経ちました。新入部員とコンクールの取材に行ったとき、心の中で「実は俺も初めてなんだ」と思っていたことは内緒です。(中村ノブアキ)
- ▼若手演出家コンクールの取材に参加しました。新進演出家の個性的で、のびやかな創造力と、協会の若い才能を育てようとする愛情に触れ、心洗われました。(五戸真理枝)
- ▼前号から広報部に加わりました。今回私の初執筆依頼に「ころよく応じて下さった島村さん、山根さん、坂田さん、本坊さん、ありがとございました！」(富士川正美)
- ▼令和とかラヴビーとか五輪とか万博とか言っちゃってさ、巷では非正規雇用が四割に達してるらしいぜ、現代日本。(篠本賢一)
- ▼新入部員の野月です。今回、取材についていき『D』が出来上がる過程を興味深く見る事が出来ました。今後よろしくお願いたします。(野月敦)
- ▼新入部員の廣岡です。初めての編集後記です。緊張してます。録音して文字を起すのは大好きです。是非、自分にお任せ。(廣岡悠那)